

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

WIRED VISION発

それは現場で起きている。
～モノづくり企業のエコ意識～

“アカルイ”未来を考えるニュースサイト、WIRED VISIONの人気ブログコンテンツがイズムに登場！
ライター・小林ミノル氏が様々な場所で見つけた「エコの芽」の数々をご紹介します。



(このコンテンツは、2007年10月～2008年5月までWIRED VISIONで連載した内容を一部再編集したものです。)

■コンテンツ一覧

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 
2007年
10月22日 14時17分
第1回
エコのエッセンスを探そう | 
2007年
10月26日 11時32分
第2回
社長が語る現場の使命 | 
2007年
10月29日 11時23分
第3回
小さな努力の粒が巨大な風船に | 
2007年
11月02日 13時00分
第4回
空間全体がエコ！～「エコロジーideas」探訪～ |
| 
2007年
11月12日 19時15分
第5回
「自立循環型住宅」にお邪魔してきた!! | 
2007年
11月20日 17時25分
第6回
新井薬師商店街のエコ活動 | 
2007年
11月29日 18時02分
第7回
静かな電動自転車ブーム到来!? | 
2007年
12月19日 14時24分
第8回
エコプロダクツ展見学記 |
| 
2007年
12月25日 11時13分
第9回
縁の下の力持ちの自負 | 
2007年
12月26日 11時00分
第10回
スターリングエンジンの開発現場に潜入！ 其の昔 | 
2007年
12月27日 11時00分
第11回
スターリングエンジンの開発現場に潜入！ 其の式 | 
2007年
12月28日 11時00分
第12回
スターリングエンジンの開発現場に潜入！ 其の夢 |
| 
2008年
01月15日 13時49分
第13回
「黄海エコリージョン支援プロジェクト」とは!? | 
2008年
01月25日 15時51分
第14回
「黄海エコリージョン支援プロジェクト」とは!? (続編) | 
2008年
02月01日 10時00分
第15回
パナソニックセンター大阪に使用済みてんぷら油を持って行ってみました! (1) | 
2008年
02月05日 11時30分
第16回
パナソニックセンター大阪に使用済みてんぷら油を持って行ってみました! (2) |
| 
2008年
02月21日 10時08分
第17回
生水の郷エコツアー参加レポート (1) | 
2008年
02月26日 17時39分
第18回
針江生水の郷エコツアー参加レポート (2) | 
2008年
03月24日 21時37分
第19回
METECツアー同行記 (1) | 
2008年
03月26日 11時15分
第20回
METECツアー同行記 (2) |
| 
2008年
03月28日 11時03分
第21回
METECツアー同行記 (3) | 
2008年
03月31日 10時55分
第22回
METECツアー同行記 (4) | 
2008年
04月01日 10時58分
第23回
METECツアー同行記 (5) | 
2008年
04月07日 11時06分
第24回
地下トンネルの使い方 ～松下エコシステムズ探訪記 (1)～ |
| 
2008年
04月08日 15時24分
第25回
春日井新工場のエコアイデア～松下エコシステムズ探訪記 (2)～ | 
2008年
04月09日 11時09分
第26回
技術探訪 ～松下エコシステムズ探訪記 (3)～ | 
2008年
04月10日 11時10分
第27回
メダカハウスの効用 ～松下エコシステムズ探訪記 (4)～ | 
2008年
04月21日 01時00分
第28回
気調ハウス訪問 ～松下エコシステムズ探訪記 (5)～ |
| 
2008年
04月22日 01時00分
第29回
平田為茂松下エコシステムズ社長インタビュー ～松下エコシステムズ探訪記 (6)～ | 
2008年
04月23日 01時00分
特別編:
不肖・編集Eが「エコアイデアワールド」を訪ねた | 
2008年
04月24日 01時00分
特別編:
セヴァン・カリス＝スズキさんと「アースキャラバン2008」 | 
2008年
05月13日 17時59分
最終回
マチュピチュと企業の21世紀的な環境活動 |

▲ このページのトップへ

スタッフ一覧へ / 第1回 エコのエッセンスを探そうへ

このコンテンツ、あなたの評価は? おもしろい ふつう おもしろくない

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

第1回 (2007年10月22日 14時17分公開)
エコのエッセンスを探そう

ここ1年ほど、地球温暖化対策を中心に環境問題に積極的に取り組む企業が増えている。また、ファッションやアートのテーマとしても「エコ」は注目を集め続けている。

率直に考えて、そういった取り組みの増加やイメージが定着するのはいいことだと思う。

ライフスタイルとして「エコ」が確立しつつあるならば、それは喜ばしいことだし、「エコ」の定義の一つが、「日々の暮らしにおけるちょっとした態度の修正によるエネルギーの節約」だとしたら、多くの人に「ちょっとした態度の変更」を促すためには、それが「ハイブリッドカーに乗ってアカデミー賞授賞式にかけつけるハリウッドスター」というイメージの流布であっても、そういったポジティブな方向付けは必要不可欠だからだ。(「エコファッションの到来」を心配するのは、当分先の話だ)。

エネルギーを節約するための革新的な新技術や新製品が、研究者や技術者の弛まざる努力によって誕生している。だが、日常的にそういったものが生まれているわけではない(そもそも、それでは革新的な新技術や新製品ではなくなってしまう)。

一方で、一人一人のちょっとした行動の変化は、積み積もれば革新的な新技術や新製品に匹敵する大きな効果を生む可能性がある。そしてそういった変化は、生活や仕事場の日常のなかでコツコツと培われていくものだと思う。

この連載では、企業の現場を中心に、そんな隠されたエコの萌芽を見つけ、紹介していくつもりだ。そして、それはなにしろ芽が出たばかりだから、まだ名前もついていないし、かっこよくもないし、華やかさもないかもしれない。あるいは、「これってホントにエコなの？」という代物もあるかもしれない。だけど、大事に育てていけば、大きな花や豊かな実をつける試みがきっとあるはずだ。

とりあえず、そんな問題意識を、このブログの出発点にしようと思う。

今日のエコの芽
「エコのエッセンスを探そう」

ライター：小林ミノル

1975年大晦日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「縁の下力持的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

トップ
ページへ
戻る



第2回 (2007年10月26日 11時32分公開)

社長が語る現場の使命

10月5日、松下電器の大坪文雄社長が「エコアイデア戦略」なるものを大々的に発表するというので、10月5日、りんかい線に乗って、東京・有明にある「パナソニックセンター東京」に向かった。

会場に到着すると、まず規模の大きさに驚愕。300～400人は入りそうな会場である。見回せば、外国人プレスも多数いる模様。英語、中国語、ロシア語の同時通訳まで完備されているようだ。そしてどこからともなく聞こえてくる小鳥さんたちのさえずり…。さすがは世界の松下、記者会見の環境設定も抜き無し。

さて記者発表で大坪社長が発表した「エコアイデア戦略」は
「生産活動で生じる二酸化炭素の総排出量を、3年間で30万トン減らす」というものだった。ポイントは、CO2の削減目標を、これまでの生産台数単位から企業全体での総量削減に切り替えたことにある。

具体的には、

- 省エネ技術の開発と省エネ商品販売の促進
- 生産活動のみならず、調達、販売、物流、リサイクルにいたる全てのモノづくりプロセスで生産性の向上を図る
- 社員だけでなく、地域社会やグローバルにエコ活動を広げる

という3つの「エコアイデア宣言」活動を通じて、今後CO2の削減を目指していく。

しかし、疑問も生じる。

つまり、「利潤追求を目的とする企業活動と環境への取り組みは本質的に矛盾するのではないか?」という疑問だ。他の新聞記者さんや雑誌の記者さんたちも、似た疑問を抱いたようで、記者発表後に行われた質疑応答で、同じような質問が出ていた。

それに対して大坪社長はこう回答している。

「従来から我々は軽薄短小を商品開発のコンセプトにしてきました。このコンセプトそのものが、省エネ、省資源につながる発想でした。しかしこれからは、よりエネルギー効率、資源効率につながる取り組みを従来以上に強く意識しながら商品開発を進めていくことによって、矛盾無く、生産拡大とエネルギー削減を両立できると考えています」

今回の記者発表が、企業イメージの向上をその目的に含んでいるのは、もちろんのことだが、3年間で30万トンのCO2削減というのは生半可な目標ではないと思われる。その辺に松下電器が「環境」という価値観を本気で広めていく決意を感じる。いったい「現場」では、どんな取り組みが行われているのだろうか? それを確認するのが楽しみだ。

今日のエコの芽

軽薄短小+現場の意識=CO2の総量規制



ライター：小林ミノル
1975年大崎日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに遅まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「縁の下の力持ち的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。
～モノづくり企業のエコ意識～



トップ
ページへ
戻る



第3回 (2007年10月29日 11時23分公開)

小さな努力の粒が巨大な風船に

「それにしても、で、でかい…」

10月9日、東京ミッドタウンで、ジオラマの上に浮かぶ巨大なバルーンを僕は眺めていた。

幅9.3メートル、奥行き7メートルという巨大ジオラマの頭上に、直径3メートルのバルーンが吊り下げられている。これは、松下電器の環境活動推進キャンペーン「Nのエコアイデア」のキャンペーンイベント用に作製されたジオラマだ。そのオープニングイベントの取材に来ていたのである。



1/300スケールのジオラマの頭上に浮かぶ巨大バルーン。中央には針のような東京タワーが。周囲にいる人々とジオラマを比べてみるとその大きさがわかる。

このキャンペーンは、2006年10月から2007年9月までに松下電器が削減したCO2の総量を実感してもらうために企画されたものだ。

実際に同社が昨年1年間で削減したCO2の量は、直径870メートルの球体に相当するという。お約束の“東京ドーム”に直すと、約280個分だ。

当日は、松下電器が参画したWWFによる中国・黄海地域の生態系保護プロジェクトや、ベトナム北部での植樹活動の取り組みが紹介されたほか、ゲストのアグネス・チャンさんへのエコ活動に関するインタビュー、幼稚園児たちによるエコソング合唱、エコ活動のキャンペーンキャラクターであるデンマークのグリーンサンタとのQ&Aなどがおこなわれた。



アグネス・チャンさんと子供たち。また、ジオラマの上の球体がスクリーンになり、グリーンサンタがデンマークから生中継で登場。

今回のイベントは、同社の環境活動をグローバルに広めていくという「エコアイデア戦略」に則ったプロモーションとして捉えられる。松下電器コミュニケーショングループ宣伝企画チーム参事の赤木文夫さんによれば、これまでも同社は環境活動のPRをおこなってきたが、これからはCO2削減により焦点を絞ってPRを進めていくことになったそうだ。

当日は僕をはじめとする取材陣のみならず、ミッドタウンをたまたま訪れた通りすがりの人たちが足を止めて、「何これ!?」「スゴイね!」とジオラマやバルーンにしばらくの間見入っていた。

企業の環境活動は、なかなか消費者や社会に認知されづらい部分があったのかもしれない。しかし、CO2の削減量を巨大バルーンという目に見える形でキャッチーに伝える今回のキャンペーンは、改めて松下の企業努力の真摯さを伝える役割を果たしたのではないだろうか。そして、このインパクト抜群の展示を見た多くの人は、一人一人の努力の積み重ねの大切さを心のどこかで実感したはずだ。「小さな心がけや工夫がこんなに大きな効果を生むんだ!」と。

それにしても、これだけのCO2を削減するためには、かなり地道かつ多様なエコ活動がおこなわれているはずだ。モノづくりの現場でどんな努力が積み重ねられているのだろうか? それは徐々にこの連載でレポートしていこうと思う。乞うご期待!

今日のエコの芽

小さな努力の粒が巨大な風船に



ライター：小林ミノル
1975年大崎生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の“緑の下力持的”な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。
～モノづくり企業のエコ意識～

トップ
ページへ
戻る

第4回 (2007年11月2日 13時00分公開)

空間全体がエコ！～「エコロジーideas」探訪～

第2回の記事で取り上げた大坪社長の記者会見後、会場となったパナソニックセンター東京（東京・有明）の2階の環境展示コーナーがちょうどリニューアルしたばかりということで、見学してみることにした。

同センターは、02年のオープン当初から、風力・太陽光利用システム「風かもめ」や、生ごみ処理システム、雨水利用システム、燃料電池コージェネレーションシステムなど最先端の省エネ技術が設置・導入されているエコ施設である。

特に同センターの2階には、隣接する「ユニバーサルデザインideas」コーナーとともに、「エコロジーideas」コーナーが新展開されている。

というわけで、さっそく2階へ。一步足を踏み入ると、まるでそこは室内ジャングル! アカサヤマメノキやゼラニカ、ニームやジャポチカバなどが、いたるところにニョキニョキと植えられているのだ。そんなグリーンパークのなかに、洗濯機、エアコン、冷蔵庫など、松下グループが開発した最新エコ商品がずらりと並んでいるのである。

ジャングルに迷い込んだ探検家よろしく、ぐるぐる回って解説を読んだり展示品を撮影したりしていると、トイレの展示にふと目が止まった。「なぜにトイレがエコなのか?」と思って説明書きとにらめっこすること数十秒。すると、近くの女性スタッフの方が、いかにこの新型トイレ「アラウーノ」の節水機能が優れているのかについて教えてくれた。どうやら、「ターントラップ洗浄ポンプ」という技術によって、10年前のトイレと比べ一回あたり7.3リットル（大洗浄時）もの節水を実現しているらしい。

さらに商品だけでなく、この展示フロアには「エコロジーideas」の名にふさわしく、いろいろなアイデアが凝らされていた。

まずは先ほども述べた室内の植物。植物を植えることで、一定の空調や湿度を保てるのだという。単なる自然を感じられるインテリアじゃないのだ。部屋全体の照明も、セラミックメタルランプやバルックボールなど、省エネ照明器具を効果的に配置することで、同じ明るさながら改装前の1/2弱まで消費電力を減らしている。また、隣接しているカフェ「E-FEEL」のテーブルは、すべて廃材でできている。しかも、カフェのカウンターの灯りは、家庭用燃料電池コージェネレーションシステムで作られた電気が使用されている（加えて、光感知センサーによって、暗くなった時だけライトが点くようになっている）。窓に面した座席スペースは太陽光のみで、テーブルに設置されたノートパソコンで環境コンテンツも楽しめちゃうのである。

それにしても「展示場」に来たという印象が薄くて、どこか心地いいのはなぜだろう？

カフェ「E-FEEL」でくつろぎながら、もう一度全体を見回すと、なんとなくその理由がわかった。照明、カフェ、説明プレートなど、空間を演出するものすべてがエコプロダクツなのだ。商品だけでなく、展示の仕方もアイデアや工夫次第でエコになるんだな～。

今日のエコの芽
アイデア次第で魅せるエコに

ライター：小林ミノル

1975年大崎日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「緑の下の力持的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。
～モノづくり企業のエコ意識～トップ
ページへ
戻るWIRED VISION 発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



パナソニックセンター東京 2階の「エコロジー ideas」。フロア全体に植物が植えられている



「アラウーノ」の洗浄ポンプ部分の構造をスタッフの方に丁寧に説明してもらう。



太陽光を活かしたカフェ「E-FEEL」。テーブルには廃材が使われている

WIRED VISION発

それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

第5回 (2007年11月12日 19時15分公開)

「自立循環型住宅」にお邪魔してきた!!

～自立循環型住宅～

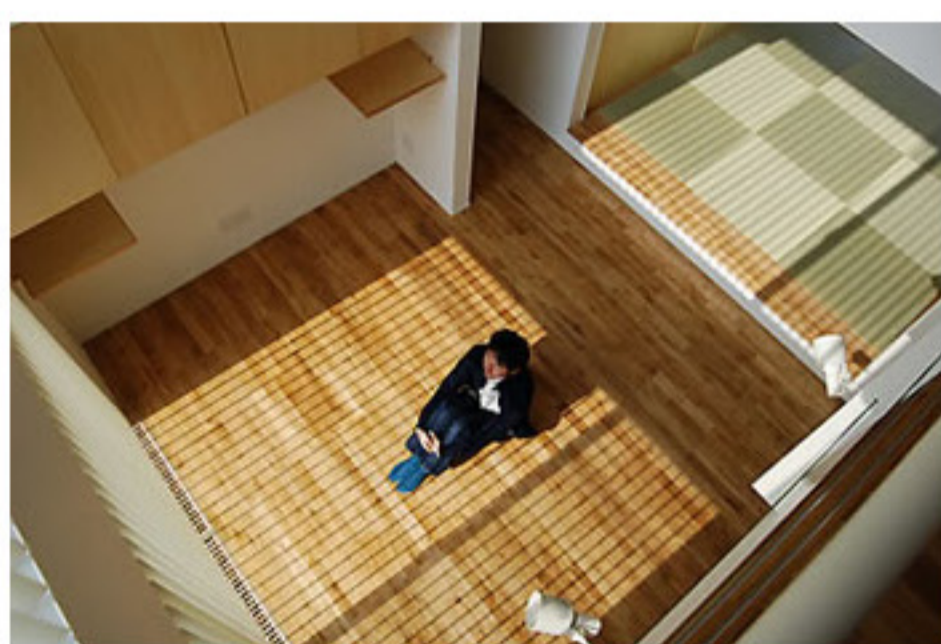
「気候や敷地特性などの住宅の立地条件および住まい方に応じて極力自然エネルギーを活用した上で、建物と設備機器の設計や選択に注意を払うことによって、居住性や利便性の水準を向上させつつも、居住時のエネルギー消費量（二酸化炭素排出量）を2000年頃の標準的な住宅と比較して50%まで削減可能な、2010年時点までに十分実用化できる住宅である」（財団法人 建築環境・省エネルギー機構のガイドラインより）

最近「自立循環型住宅」という住宅建築が注目を浴びているらしい。立地条件や暮らし方に適した設計によって、自然エネルギーを有効に活用し、居住時のエネルギー消費量を少なく保つ住宅のことだが、具体的にはいったいどんなアイデアや工夫が凝らされた住宅なのだろうか？ 百聞は一見に如かず！ 横浜に新築ほやほやの「自立循環型住宅」があるということで、早速お邪魔してきた。



Oさん邸。植や植栽、デッキはこれから設置される予定。デッキや植栽は放射熱を緩和する役割を果たす

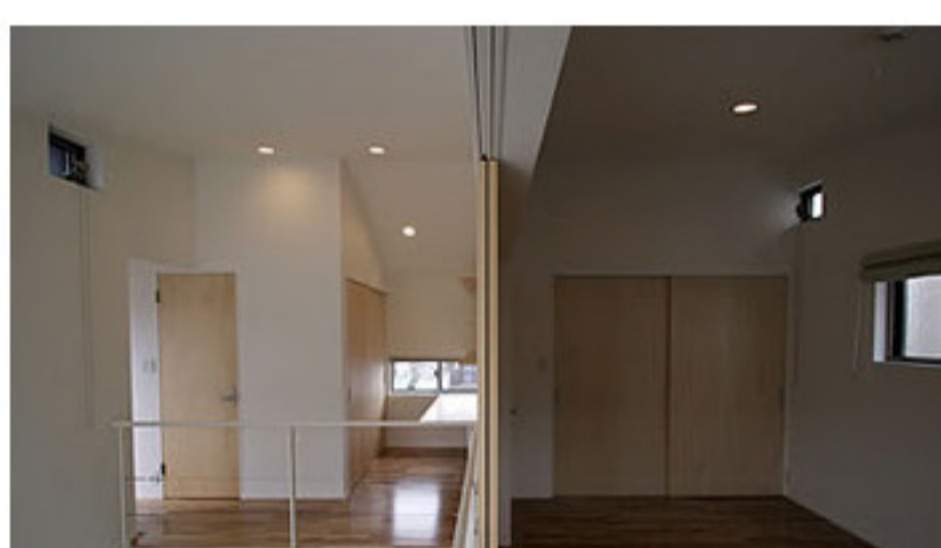
JR東戸塚駅の丘の上にある閑静な住宅街、そこに目指すOさん邸はある。坪数は27坪なのだが、2階建ての室内は、中央のリビング部分が吹き抜けになっていてとても開放的だ。さらに吹き抜け部分の南側は一面窓になっていて、そこから光が燦々と差し込んでいる。



自然光が差し込む1階リビングと和室

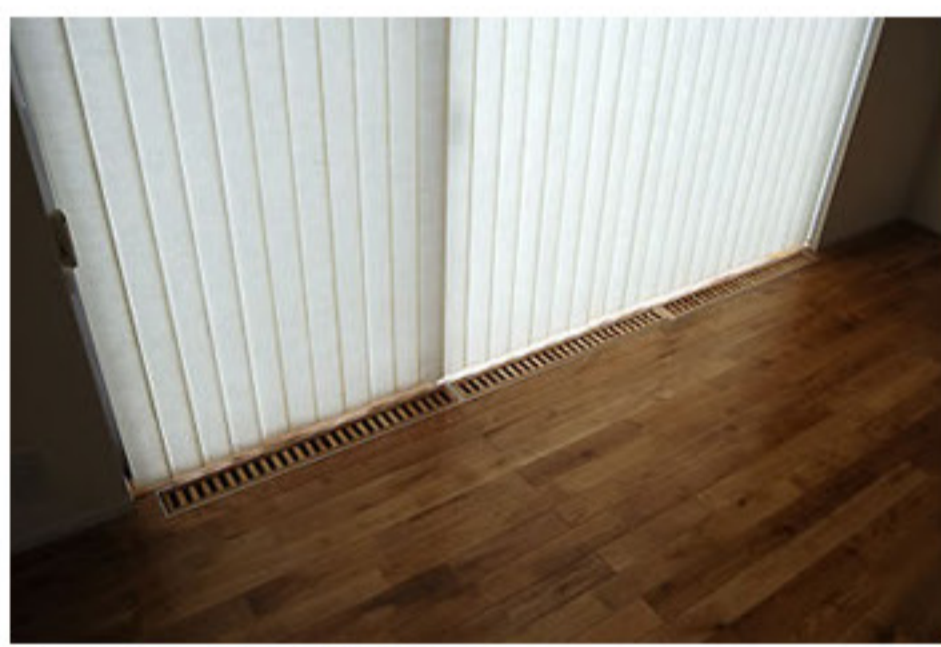
設計を担当した建築家の井川一幸さんによれば、家の南側は道路に面しているものの丘の北側に位置している。そこで、自然光をできるだけ取り入れられるように、巨大な窓を吹き抜け部分に配置したそうだ。その一方で、格子の柵を庭に設けることでプライバシーに配慮。内部をすべて隠すのではなく外側からの視線を計算に入れて、侵入者が入りにくくするよう防犯にも対処した。

また2階や北側に効果的に設置された窓が、風の回流をつくることで夏の体感温度を下げる役割を果たしている。訪問したときはまだ完成していなかったが、庭には植栽とデッキが設置される予定だ。植栽やデッキは夏の放射熱を抑制する働きがあるという。



効果的に窓を配置することで室内の空気循環が活性化される（2階）

一方、冬の季節は、RCのコンクリート部分を温める電気蓄熱床暖房が威力を発揮する。床に通風口を設け窓から入り込む冬の冷気を床下に落とし込んだり、100mmの断熱材を使うことで、保温効果にも配慮しているそうだ。さらに屋根には太陽光パネルも設置されている。

窓の近くの床に設けられた通風口
冬には冷気を下に送り込む役割を果たす

オーナーのOさんご夫妻は、定年後の暮らしのため、2年前から住宅の新築を計画したという。一番の希望は、老後の暮らしのランニングコストを省エネによってできるだけ安くしたいということ。そこで建築家の井川さんは、この「自立循環型住宅」を提案したという。



電力消費効率の高い省エネ電球を採用

「二人暮らしということで、デッドスペースをつくらないことに注意しました。住宅は、大きければいいというものではないと思うんです。空気や光が行き渡るように設計することで省エネにもなるし、コミュニケーションも密になりますよね」



10年20年後にも発見のある住宅にしたいと語る井川さん

この間取りなら、1階にある台所と2階にある書斎で会話することも可能である。実はエコと団欒って、すごく親和性が高いものなのかもしれない。自分もいつかはこんな家に住みたいものです。と、まずはその前にコツコツ貯金せねば…。

今日のエコの芽
エコと団欒は親戚関係!

ライター：小林ミノル

1975年大晦日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「緑の下」の力持的「な環境対策を世に広めたい」と考えている。

▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

トップ
ページへ
戻る

WIRED VISION発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

第6回 (2007年11月20日 17時25分公開)
新井薬師商店街のエコ活動

眼病予防・治癒のご利益で有名な東京都中野区の新井薬師。こちらの地元商店街が、エコバッグキャンペーンを10月からおこなっているという。具体的にどんな活動がおこなわれているのだろうか？ 中野駅からほど近い「薬師あいロード商店街」に急行し、「新井地域の活性化を考える会」実行委員の野中隆夫さんにお話をうかがった。



徳川秀忠の五女の眼病を治したという言い伝えで有名な新井薬師（正式名称は新井山梅照院薬王寺）

「今年の春、他の5つの地元商店街とともに勉強会を立ち上げ、専門家の方に、商店街の活性化について診断していただいたんです。そうしたところ、名所である新井薬師の門前町であることをあまりPRできていないと指摘されました。そこでまず、目のマークをあしらったオリジナルシンボルマークを作成し、あわせて環境活動としてエコバッグの配布も始めたんです」（野中さん）

商店街が作成したエコバッグは折りたたみ式とクーラー機能付きの2種類。どちらも表面にオリジナルシンボルマークがあしらわれている。自治体や周辺の金融機関、企業の協力も得て、すでに4000枚が配布されたそうだ。また加盟店でエコバッグを利用すると、キャッシュバックポイントも貯まるようになっている。

「利用者は年配の方がやはり多いですが、若い方にも利用していただいています。これまで商店街の活性化というと、売り上げを伸ばすようなものが主流でした。しかし、こういった広く社会に貢献できる活動も、これからは大切になってくると思います」

商店街の活性化とエコ。あまり関係なさげに見える両者だが、エコへの取り組みが注目を集めれば、商店街の活性化にもつながるだろうし、地道な取り組みこそがエコを推進させる原動力でもある。地域の活性化も環境活動ももっとも良くないのは「何もしない」ことなのだ。こういったボトムアップ型のエコ活動が、日本でももっと増えたらいいのと思う。

今日のエコの芽
エコも商店街の活性化も現場力

ライター：小林ミノル
1975年大晦日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の“緑の下の力持的”な環境対策を世に広めたいと考えている。



- ▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。
- ▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。
～モノづくり企業のエコ意識～



トップ
ページへ
戻る



第7回 (2007年11月29日 18時02分公開) 静かな電動自転車ブーム到来!?

エコな移動手段として注目を浴びている自転車。なかでも電動自転車が静かなブームになっているようだ。1993年に販売がスタートした電動自転車は、各社の参入や技術開発によりコストダウンが進み値段も低下。加えてママチャリタイプのみならずストリートタイプやマウンテンバイクタイプなど種類も増え、06年の販売台数は25万台まで達している。

もちろん電動自転車は、電池が切れれば充電が必要だ。そのためCO₂が排出されないわけではない。しかし、同じ距離を自動車や電車で移動するよりも消費エネルギーは格段に少ないし、バイクのように騒音が出るわけでもない。坂道の多い場所を移動するにはうってつけだし、小さな子供を幼稚園や保育園に送り迎えするママたちの強い味方でもある。

自分の回りにも、自転車に乗って通勤・移動している人は少なくない。東京23区は全部自転車移動という猛者もいる(吉田豪さん)。そのうちの1人、イラストレーターのUさんは、移動するのはもっぱらパナソニックサイクルテック社製の「Casual vivi」という電動自転車派だ。しかも、自転車用のオシャレ地下足袋やポンチョを揃え、さらにはGPSまで購入予定(!)だという。

「晴れていて半径5～6キロまでの目的地なら、必ず自転車に向かってます。最近都内の駅周辺は駐輪場も増えているので、置き場所にもそれほど困らないし。それに、猫を飼っているので、ネコ砂など重い荷物を運ぶときに電動自転車はとても便利なんですよ」(Uさん談)



愛車「Casual vivi」に乗るUさん。viviシリーズのバッテリーには、リサイクル原料を多く含むリチウムイオン電池、ニッケル水素電池が使用されている。



ポンチョ着用バージョン。行きが晴れていても滞りが雨の場合に効力を発揮する。

東京都が2007年1月に発表した「自転車の安全利用推進総合プラン」によると、都内駅周辺の駐輪可能台数は2005年の段階で75万台。実はこの数字、乗り入れ台数の72万台を上回っている。ただし、駅から100m以上離れている駐輪場も多く、数年前と比べて減少してはいるものの、11万台の放置自転車が同年には撤去されたそう(都の青少年・治安対策本部総合対策部交通安全課に問い合わせたところ、都内駅周辺の駐輪可能台数は2006年には78万9千台まで増加)。また、放置自転車対策は、各市町村ごとの対応となるため、地域によってかなり取り組みに差がある。一方、歩行者と自転車が安全にすれ違える幅3メートル以上の歩道や自転車専用道路の普及率は、欧米と比較して日本は圧倒的に低いままだ。

かつて気候学の第一人者である住明正東京大学教授に取材したとき、住教授は、地球温暖化対策として、エネルギーを使わない「レジャー」をもっと普及させなくてはならず、そのためにはインフラの整備こそが必要だと力説されていた。石原東京都知事には、モーターレースの旗振り役だけでなく、環境負荷の低い自転車関連のインフラ整備をより一層推進してほしいところである。

最後にUさんからはこんな提案も。

「環境活動に関心のある企業は、自転車通勤者に、購入補助金あるいは交通費に代わるものを支給したらいいんじゃないでしょうか？」

これは妙案かも。ただしUさん自身はフリーランスのイラストレーターなので、適用外なのだが…。

今日のエコの芽 エコを楽しむにはインフラ整備が必須



ライター：小林ミノル

1975年大晦日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の“縁の下の力持ち的”な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。
～モノづくり企業のエコ意識～



トップ
ページへ
戻る



第8回 (2007年12月19日 14時24分公開)

エコプロダクツ展見学記

12月13日から15日の3日間に渡って東京ビッグサイトで開催された「エコプロダクツ2007」。第9回目となる今回は、「地球と私のためのエコスタイル」をテーマに、およそ6000もの企業やNPOなどの各種団体が参加。そんな日本最大のエコイベントにふさわしく、開催期間中は、各企業のエコプロダクツの展示のほか、小池百合子前環境大臣による基調講演やアルピニストの野口健氏らによるパネルディスカッション、エコカーの乗車体験など、多彩なイベントが開催されていた。そして、3日間の開催期間を通しての総来場者数は、過去最高を記録しなんと16万人超 (!) だったという。

自分も、16万人の1人として日本のエコの進み具合を実際に目にすべく、初日となる13日に松下グループをはじめとする各企業やNPOのブースなどを見学してきた。

松下グループの展示ブースでは、「松下グループのエコアイデア」をテーマに「商品のエコアイデア」「モノづくりのエコアイデア」「ひろげるエコアイデア」という3つのコンセプトのもと、エコプロダクツの展示や環境活動への取り組みが紹介されていた。



松下グループの「商品のエコアイデア」。エコプロダクツとパルンが展示・紹介されていた

たとえば、「商品のエコアイデア」では、ヒートポンプなめドラム洗濯乾燥機やパルックボールプレミアといったエコ商品、コジェネレーションシステムやナショナルエコキュートなどエコ技術の紹介とともに、それぞれの商品や技術のCO2削減量を一日一人当たりのグラム数で算出したパルンや省エネ生活のノウハウを解説したアニメ映像などを展示している。



「商品のエコアイデア」コーナーで、ヒートポンプ給湯機の仕組みを小学生のグループに解説している松下電器の説明員の仕

一方「ひろげるエコアイデア」では、以前このブログの第3回でも紹介したベトナムでの植林事業、中国黄海の環境浄化活動への取り組み、さらに環境対策工場の概要などが紹介されていた。

しかしなんといっても今回の目玉は「モノづくりのエコアイデア」の展示方法。こちらでは、プラズマテレビ「VIERA」を題材に、製造から物流、販売、利用方法、リサイクルに至るまで、どのような省エネ、環境対策のアイデアがたった一つの商品に凝らされているかを、ブースの1/3全部を使って紹介しているのだ。各所にリンクや貨物コンテナのセットも配置され、その臨場感には正直驚かされる。ちょうど解説ツアーが開催されていたので、自分も早速参加してみることにした。

ツアーはおおよそ15分。ガイドのお姉さんが、身ぶり手振りを交えながら、鉛・水銀未使用のパネル、無駄を省いたディスプレイの切り出し方法、鉄道を使った省エネ物流、難燃型プラスチックパーツの再利用技術などを解説していく。紙芝居やクイズなど、プレゼンにも工夫を凝らしていたせいか、自分と一緒に回った子供たちが飽きずに目を輝かせながら説明に聞き入っていたのが印象的だった。



紙芝居やクイズ形式を取り入れ、子供を飽きさせない仕掛けになっているVIERAのガイドツアー。

このように、「モノづくりのエコアイデア」コーナーは、「VIERA」という1つの商品のライフサイクル全般を見据えた展示になっていて、「ゆりかごからゆりかごに戻るまで」という今回のプロダクツ展の考え方に沿ったものにもなっていた。「商品のライフサイクル」という考え方の普及とともに、「エコ」という言葉がその場しのぎの概念ではなく、より長いスパンで捉えられるものとなりつつあるようだ。



VIERAが生まれてリサイクルされるまでを説明した、10メートルの絵巻も展示されていた。

そうこうするうちにツアーも終了し、夏休みのラジオ体操のようにスタンパが1つ押された用紙をいただく。このスタンパリーは、松下電器のブース内で説明員の方からエコアイデアの解説を5つ聞くとプレゼントとしてパルックボールプレミアが景品にもらえるというものだった。



スタンパリーのプレゼント用パルックボールプレミア。これ自体もエコアイデアがたくさん詰まった商品だ。

こういったスタンパリーの試みは松下電器のブースだけでなく、他の企業のブース、あるいはエコプロダクツ展全体でも行われていた。おそらく子供の入場者を明確に意識した試みのように思われる。加えてエコキャラクターの着ぐるみも充実していたし、多くの展示品がわかりやすい言葉で説明されていた。そして、子供の入場者は実際非常に多かった。



子供たちに取り囲まれるエコイメージキャラクター「お茶犬」。自分も一緒に写真を撮るうと思ったがあまりの人数ぶりに断念。

取材後、自然食品コーナーのレストランで有機栽培野菜を使った中華丼を食べながら、「長期間の課題でエコを題材に取り上げる小学生って、かなり多いんだろなあ」としみじみ考えた。小さい頃からエコとは身近に接していれば、きっと大人になっても「エコ」は「言わずもがなの常識」として身に付くのかも知れない。エコプロダクツ展は、そういった子供のエコ教育に、かなり大きな役割を果たしているのではないだろうか。

今日のエコの芽

未来のエコの芽は、子供たちの教育から



ライター：小林ミノル

1975年大塚生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに達するまで気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「緑の下の力持ち的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。



WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



トップ
ページへ
戻る

第9回 (2007年12月25日 11時13分公開)

縁の下の力持ちの自負

松下エコシステムズ (MESC) という企業が、松下グループ内にある。明治42年に川北電気企業社として創業された、とても長い伝統を持つ会社だ。日本初となる純国産の交流扇風機の製造 (当時はかなり画期的だったはず) から始まった同社は、松下電器と関係を深めるなかで、昭和31年に松下グループの一員となり、松下精工と社名を変更。空調機器や環境浄化設備のリーディングカンパニーとして国内外で地歩を築き、平成15年に松下エコシステムズと再度社名を変更してからも、松下環境空調エンジニアリングとともに、環境システム分野を担う松下グループの中核企業として、その技術力をいかに発揮し続けてきた。

同社が開発・製造している製品は、一般家庭向けの換気扇や空気清浄機から、大型トンネルの一酸化炭素や粉塵を取り除くジェットファンや電気集塵システム、工場の空調システムまで多岐に渡っている。同社製換気扇は金額ベースでグローバルシェアNO.1、2006年には国内生産累計台数がなんと1億台を突破。さらにトンネルの空気浄化システムは、国内のみならず、ベトナムやスペインの幹線道路のトンネルにも導入されている。ほかにも、水質、土壌浄化システムや、太陽光と風力を利用した照明システム「風かもめ」の開発など、その取り組み具合は、まさに「ザ・エコカンパニー」。言い換えれば、我々の生活のインフラ分野のエコを司っている会社なのである。同社の平田為茂社長も、12月10日に行われた記者会見で、より一層の「グローバル化」と「環境技術立社の確立」をMESCグループは目指していくと宣言した。



MESCグループの今後の方針について説明する平田為茂MESC社長 (左)。中央は龍谷実松下環境空調エンジニアリング社長、右は平田博史同社常務取締役。

松下グループは、エコアイデア戦略として、今後3年間で30万トンのCO2の排出量を減らすことを宣言している。しかし、とりあえず今回の発表では、MESCとしての具体的な数値目標というものは発表されなかった。ただ、同社のこれまでのエコへの取り組みが一朝一夕のものではないという雰囲気＝自負がこの記者会見からはひしひしと感じられた。90年の歴史があるのだから、それは当然かもしれない。また、記者会見では、「いろいろな具体例を挙げたいが、ご協力している他社さんとの関係で、公表できないプロジェクトが多いんです」と、平田社長や龍谷実松下環境空調エンジニアリング社長が歯がゆい表情で説明するケースも多かった。やはり「縁の下の力持ち」にそういった苦労はつきものなのだ…。言葉にならない貢献や、数字にならない努力、忘れがちだが、我々の日々の暮らしはそういったものから多大な恩恵を受けているのだ。

今日のエコの芽

エコも縁の下の力持ちによって支えられている



ライター：小林ミノル

1975年大崎生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「縁の下の力持ち的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。
～モノづくり企業のエコ意識～トップ
ページへ
戻る

2008年9月23日公開

(このコンテンツは、2007年10月～2008年5月までWIRED VISIONで連載した内容を一部再編集したものです。)

WIRED VISION発

それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



第10回 (2007年12月26日 11時00分公開)

スターリングエンジンの開発現場に潜入！ 其の壱

バイオエタノール、太陽光発電、ハイブリッド…。環境負荷の高いガソリンエンジンやディーゼルエンジンなどに変わる代替エネルギー装置の開発がここ数年脚光を浴び続けてきた。なんとF1界でも、今後10年間はエンジン本体の開発がストップされ、ブレーキ時に発生するエネルギーを回収するハイブリッド型エンジンが導入されることになったという。そんな中、18世紀にスコットランドの牧師によって発明されたエンジンが、2世紀の時を経て再び注目を集めている。

その名も“スターリングエンジン”。

スターリングエンジンは、牧師で発明家でもあったロバート・スターリング氏が1816年に発明したエンジンで、ガソリンエンジンやディーゼルエンジンなどの内燃型エンジンと違い、温度差のある熱源を外側2カ所に当てることによって、内部の気体を膨張・収縮させて駆動力を得る外燃型エンジンシステムだ。

スターリングエンジンは、効率よく熱を伝えられること、廃熱を含め多種多様な熱源を利用できること、燃料の爆発によってピストンを動かす必要の無いため静かに作動することなどから、環境対策エンジンとしても期待されている。ただし、これまで実用化されなかったことにはそれなりの理由もあって、例えば内燃型エンジンに比べてコンパクト化が進まなかったこと、耐久性が高くないこと、コストがかさむことなどがボトルネックとなっていた。1970代のオイルショック時代、日本でも実用化が検討されたが、上記のような理由が原因で普及しなかったという過去もある。

しかし、現代の技術によって再度短所を解消し、環境問題に適したエンジンという長所を活かし実用化させようという動きも生まれている。eスター社も、そんなスターリングエンジンの実用化に向けて日夜研究を続けている企業のひとつだ。同社は松下電器のリニアコンプレッサーの開発技術者だった赤澤輝行社長が、2005年に設立したベンチャー企業である。社名の「eスター」は、エコの星となるような技術にスターリングエンジンを成長させたいという願いが込められているという。まさにスターリングエンジン開発一筋の会社なのである。

とりわけ同社は、独立行政法人の海上技術安全研究所(NMRI)や東海運と共同で2005年より鉄道・運輸機構(JRRT)から委託を受け、船舶用スターリングエンジンの研究を行ってきた。そして、ちょうどその公開実験が今年9月におこなわれたばかりということで、研究現場であるNMRIにうかがってみた。



東京都三鷹市にあるNMRIの入り口。船舶技術に関する日本の中核的研究所だ。

東京・三鷹にあるNMRIは、海上交通の安全性や効率を向上させたり、海洋資源や海洋空間の有効活用、海洋環境保全のための技術研究を行っている独立行政法人の研究機関である。中央線の三鷹駅からタクシーに乗って10分。同研究所に着くと武蔵野の広大な敷地内に、研究棟が建ち並んでいた。目指すスターリングエンジンの開発所は、敷地の奥の機械第2実験棟にある。

さらに敷地内を歩くこと5分。「機械第2実験棟」と書かれた建物に到着すると、入り口のシャッターが半分開いていた。すると奥から、eスターの赤澤社長とスターリングエンジン研究の第一人者であるNMRIの平田宏一主任研究員が現れ、我々を応接室に案内してくれた。案内される途中、棟内を見回すと、旋盤やプレス機などの工作機械やモニター、製作途中の部品やミニチュアの試作品が、所狭しとおかれている。そして散乱する鉄屑やネジ。そのたたくまは、まさに男心をくすぐってやまない「ガレージ」。ここで最先端のエンジンが開発されているのだ。(続く)



スターリングエンジンの開発現場である機械第2実験棟。男心をくすぐるたたずまいだ。



ライター：小林ミノル

1975年大晦日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の“緑の下の力持ち的”な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

トップ
ページへ
戻る

WIRED VISION発

それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



第11回 (2007年12月27日 11時00分公開)

スターリングエンジンの開発現場に潜入！ 其の貳

eスターの赤澤社長によれば、そもそもこの船舶スターリングエンジンのプロジェクトは、東京湾に停泊している船舶の排ガスを削減することを目的に開始されたのだという。船舶は、停止中もさまざまな活動をしなければならないため、エンジンを切らないまま停泊していることが多い。しかしそれが東京湾の大気汚染の大きな原因になってしまっていた。そこで、運行中に生じる排ガスを元にスターリングエンジンを使って蓄電し、停泊中はエンジンを止めて活動できるようにしようということで、今回のプロジェクトが生まれたのである。2005年度から1年に1台ずつ、計3号の試作機を製作し、今年9月、ついに研究棟での公開実験に到達。さらに来年09年1月には、船に搭載しての実験が行われるそうだ。

しかし、スターリングエンジンの原理とは、いったいどんなものなのだろうか？「外側からの熱によってシリンダー内部の空気を膨張・収縮させてピストン運動を行うエンジン」とはいうものの、実物を見たことがないため、いまいちピンとこない。自分の頭の上に浮かんだそんなクエスチョンマークが読み取られてしまったのか、ここで平田先生があるものを取り出した。

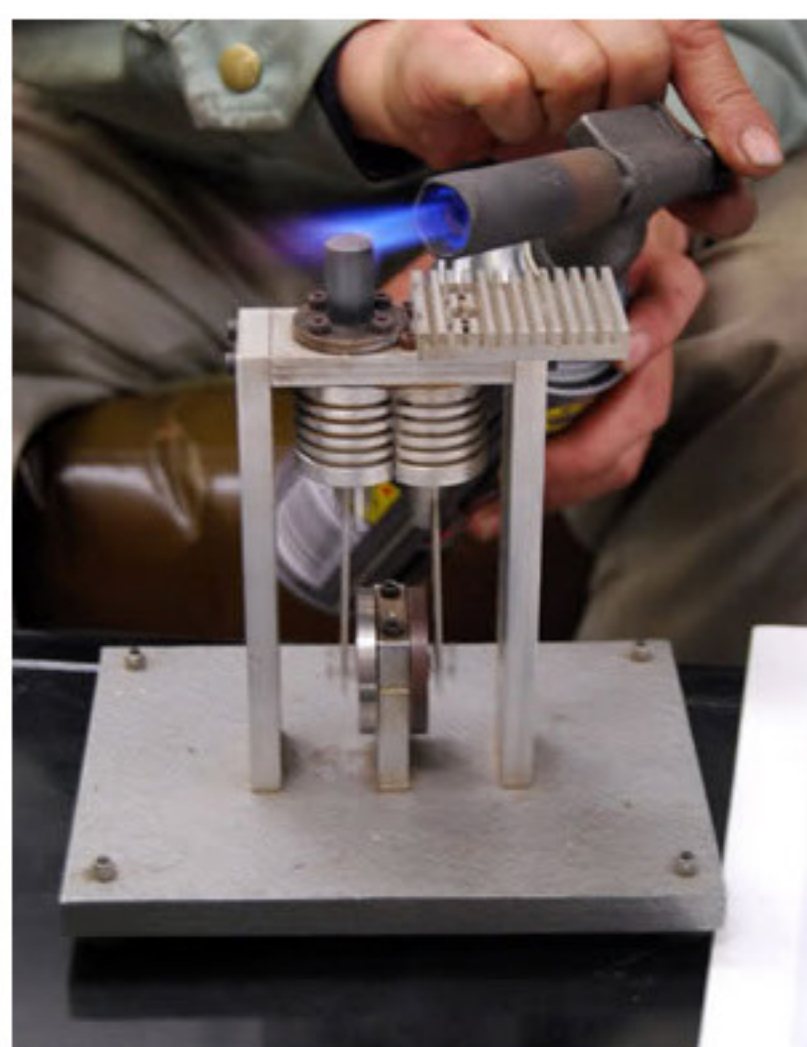
「お見せたほうが早いですよね。これが模型なんです
が…」



百聞は一見にしかず。平田先生に模型のスターリングエンジンで実験してもらおう。

登場したのは、平田先生が自分でつくられたミニチュア版のスターリングエンジン。15センチぐらいの高さで、上部には円柱と洗濯板のように刻みの入った鉄板（中央に穴があいている）が左右それぞれに置かれている。そしてその下から、中にピストンが入っているシリンダーが2本伸びていて下でホイールとつながっている。

平田先生が、この模型の円柱部分にバーナーの炎をプウォーッと当てること5～6秒。一気に左右のシリンダー内のピストンがカンカンカンと音を立てながら上下に動きはじめ、下のホイールがグルグルと高速で回り始めた！



向かって左側の円柱にバーナーをあて、シリンダー内の空気を膨張させる。右側は冷却装置。

「この円柱の部分 warmer 一方で、板のほうからは冷たい空気を送り込んでいるわけです。そうすると、円柱の下ピストンは空気の膨張圧力を、板の下ピストンは空気の収縮圧力を受け、2つのピストンが上下し続けます。その運動によって車輪も回転するわけです。これはガスバーナーの熱ですが、温かければどんなものでも動くので、船舶の場合は、ディーゼルエンジンの温かい排気ガスを上部に流しこんでピストンを動かし、発電させます。シリンダーの中の気体も空気ではなくヘリウムを封入し、より効率を高めています」

それにしても、ガスバーナーを当てただけで、こんなに早く車輪が回転するなんて…。正直エネルギーの大きさに驚いてしまった。そして、この10倍はあるかという大きさの船舶用スターリングエンジンの試作機が3機、隣の実験場に置かれているのである。（続く）



ライター：小林ミノル

1975年大晦日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の“縁の下の力持ち的”な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

トップ
ページへ
戻る



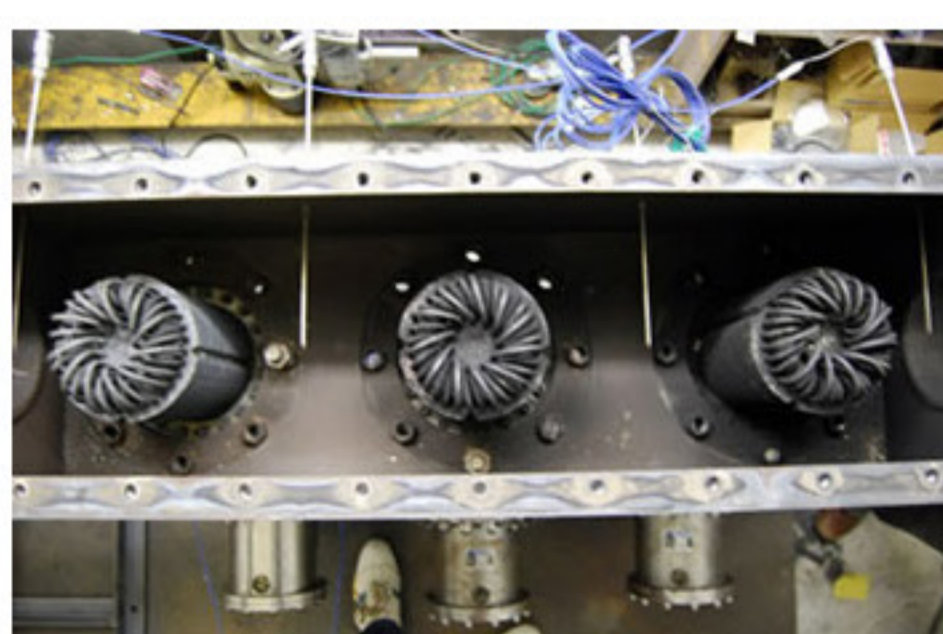
第12回 (2007年12月28日 11時00分公開) スターリングエンジンの開発現場に潜入！ 其の参

応接室の隣にある実験場では、スターリングエンジンの試作機3台が1列に並べられていた。そしてその上部には、排気ガスが通る配管がセットされている（3台並んでるのは、巨大なものを1台設置するより、より効率的にエネルギーを回収できるためだ）。



1列に並んだ3台の試作機。左から2号機、3号機、1号機の順番。真ん中が一番新しい。

そして配管の中を上からのぞくと、熱を効率よく吸収するため、いそぎんちゃくのようにになっているエンジン上部のヒーターが3つ並んでいた。

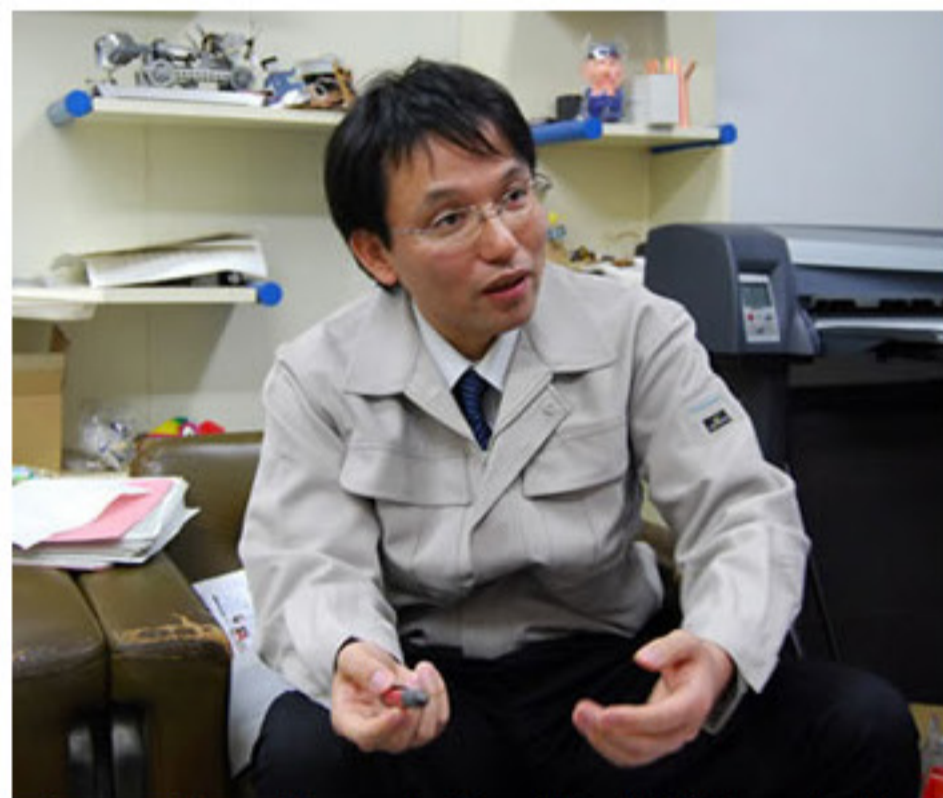


上から眺めるとこんな感じ。インギンチャクのようなエンジンの頭頂部が3つ配管上に飛び出ている。ここから排気ガスの熱を吸収する

最新の3号機では、400度の排ガスで540W前後の蓄電が可能だという。さらに同性能のエンジン3台を連動させることで、1.3kWの電力を回収できるところまで実験はきているそうだ。最終目標は、2kWで2日間蓄電し、10kWの電力を10時間接岸時に利用するというものなので、目標達成まであと少しといったところだろうか。現在は、制御回路の関連機器を製作し、船上実験のための最終調整をしている段階だそうだ。

このスターリングエンジン、来年からは、松下グループの工場廃熱を使っての耐久実験も予定されている。工場には多様な廃熱があるので、近い将来スターリングエンジンが利用される可能性も多いにあるという。

ちなみに、世の中における廃熱の温度は、100度から200度程度のものが一番多い。しかし、温度が小さくなると、エネルギー効率が低下するために当然ながら商品化が厳しくなる。現在、400度以上の高温の廃熱ならば、蒸気タービンを回すなどして電力会社が回収しているが、400度以下の廃熱の場合、温水や蒸気ではなく、電気にエネルギー転換する技術の商品化はまだまだこれからだそうだ。赤澤社長は、400度を皮切りに、少しでも低温の廃熱からエネルギーを回収できる商品を開発することがeスターのミッションだと語る。



スターリングエンジンへの熱い思いを語る赤澤隆行eスター社長。

「日本全国の工場すべてにスターリングエンジンをつけるとすると、17万セットの設置が可能です。1セットに500w蓄電できるスターリングエンジンを6台つけるとして14万2千トンのCO2が計算上は年間削減できることになります。潜在的にはそれぐらいの効果が期待できるわけです」

さらに同社は、家庭用コジェネレーションシステム用のスターリングエンジンも（同じく平田先生と協力しつつ）開発中だ。こちらはリニア型と呼ばれるタイプで、商品化できればやはり画期的な対環境効果が期待できるという。

このように、まさに最先端の環境対策技術の開発をおこなっているeスターだが、同社を立ち上げたときの回りの反応は正直厳しかったという。

「eスターは、もともと、松下電器のベンチャー支援プロジェクト『パナソニック・スピニアップ・ファンド』から誕生した会社で、通算20社目のベンチャー企業でした。しかし、年配の方からは『他の企業がずっと開発しても商品化できなかったスターリングエンジンをなぜまたやるのか?』と、何度か言われましたね。しかし、失敗した20年前とは違うやりかたで実用化したいと、強く周囲を説得しまして、私が責任を持つということでベンチャー化したわけです」

しかし、時代はeスター社に味方する。設立からほどなく、環境対策エンジンとして急速にスターリングエンジンが注目を集めるようになったのだ。そして、赤澤社長の熱意は平田先生も動かす。平田先生が、他の企業ではなくeスター社と組んだ理由は、「大きい会社から小さい会社まで、いろいろな会社から連絡はもらうんです。しかし、ベンチャーまで立ち上げて、スターリングエンジンで飯を食おうという会社は赤澤社長のeスターだけだった」から。なんとというか、赤澤社長の熱意とロマンこそがスターリングエンジンの商用化を推進させる原動力＝エンジンになったのである。

「この市場は、手つかずの状態非常に大きなポテンシャルを持っているので、我々としても、平田先生の技術をなんとか事業化させたいんです。そのためには、耐久性やコストパフォーマンスをより高めていかななくてはなりません。2010年には、400度以下の廃熱があるところに、ほぼスターリングエンジンがついているようにしたいですね」（赤澤社長）

ヨーロッパでは2007年が「スターリングエンジン元年」となったという声もあがっているそうだ。ここ日本で、スターリングエンジンが「エコの星」になる日も、そう遠くないかもしれない。

今日のエコの芽 エコの原動力は熱意とロマンだった。



ライター：小林ミノル

1975年大晦日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに遠まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「緑の下の力持ち的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



トップ
ページへ
戻る

WIRED VISION発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

第13回 (2008年1月15日 13時49分公開)
「黄海エコリージョン支援プロジェクト」とは!?

世界自然保護基金 (WWF) と松下電器産業株式会社が、昨年9月26日に発表した「黄海エコリージョン支援プロジェクト」。日中韓の3カ国が、国境を越えて黄海周辺の環境活動に長期的に取り組むプロジェクトだ。期間は2007年から2014年までの7年間。黄海周辺約46万平方キロメートルの海域「黄海エコリージョン」内の海洋生態系の保全と沿岸に住む人々の暮らしを豊かにすることを目指している。

このプロジェクトは、中国ではWWF中国と中国国家海洋局 (SOA) が、韓国では韓国海洋研究院 (KORDI) が中心となって活動をおこなっている。そして、日本からは、WWFジャパンとともに、黄海沿岸に約50の生産拠点を持つ松下電器が、WWFのコーポレートサポーターとして参加している。同社は、約1億7000万円の資金支援とともに、同プロジェクトの広報・啓蒙活動などの分野で協力していく予定だ。WWFジャパンが実施している「有明海プロジェクト」の支援経験 (2002年～2005年) もあり、そこから生まれた信頼関係が、今回のプロジェクトへの参加にもつながったという。

それにしても中国大陆と朝鮮半島に囲まれている黄海とは、どんな特徴を持った海域なのだろうか？

黄海の最も大きな特徴は、世界最大級の大陸棚と広大な干潟が存在することだ。大陸棚は底引き網漁の絶好の漁場であり、干潟はカニやゴカイ、魚の稚魚など、豊富な水産資源を産み出す源となっている。また、アジアでも有数の渡り鳥の中継地域で、韓国のセマングム干潟や東津川河口、中国の鴨緑江河口などで10万羽～15万羽単位のシギやチドリが観測されている。

ところがここ数年、黄海地域の深刻な環境汚染が報じられ、沿岸の干潟も、埋め立て工事や干拓、養殖産業の拡大により激減している。WWFの発表によれば、中国では1950年当時と比べ、干潟が約37%減少、韓国でも1917年時と比較して、43%の干潟が失われてしまったという。また、過度の漁獲による資源の枯渇も深刻で、1960年と比べ、現在の漁獲量は10分の1にまで減少してしまっているそう (昨年12月には韓国の「エコリージョン」内で原油流出事故も発生してしまった)。

そんな危機に瀕した黄海の環境保全対策として、「黄海エコリージョン支援プロジェクト」が掲げている目標の一つは、「地元地域の人々に環境保全の取り組みの主役になって環境保全を推進してもらおう」ことだ。

「このモデル・プログラムでは、地域の自治体や学校、そして漁業などに関わる人々と、黄海の大切さ、豊かさについて意識や考え方を共有し、自主的に環境の保全に取り組んでもらうことを目指します。これは同時に、資源の保全や、その持続的な利用の方法を確立する取り組みです。そして、これらの取り組みを、地域振興策として定着をはかり、他の沿岸の地域にも広めてゆくことで、海域全体の保全に活動を拡大してゆくのです」 (WWFジャパンホームページより)。

7年という長い期間を通して、沿岸に住む人々の意識改革につなげていく。たとえ、スピードがゆっくりであっても地域の人々に環境意識が根付けば、次の世代にも、また次の世代へも、その活動は受け継がれていくはずだ。

また、経済のグローバル化が進み、商品の「川下」と「川上」の距離が物理的にすく遠くなり、心理的にも「川上」の現場感を「川下」に位置する我々日本人は、ほとんど感じるができなくなっている (そういえば、そんなテーマのテレビ番組が昨年報じられていた)。もちろん、日本人の我々にとっても黄海は大きな存在だ。ハマグリやタコなど、黄海産の海産物は大量に輸入され我々の食卓に上っている。黄海沿岸で部品が製造されている工業製品もたくさんある。しかし、日本人消費者としての我々が、その現場となる「黄海」周辺の環境やそこで暮らす人々の情報に接する機会は少ない。ただし、流通がボーダーレスになったということは、見方を変えれば、他国の環境対策の遅れを、もはやその国の問題だとして批判 (あるいは無視) することができなくなりつつあるということでもある。では、具体的にはどうしたらいいのだろうか？ その回答の一案が、3カ国の国家機関や企業、研究団体が参加したWWFのこのプロジェクトなのだと思う。環境というフィルターを通してみると、通常の国境で区切られた世界地図からは見えてこない別の地図が見えてくる。そしてその新たな地図を意識する努力を、今の時代に生きる我々はし続けなければならないのだ。

今日のエコの芽
環境を通じて新たな世界地図を意識

ライター：小林ミノル
1975年大崎日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「縁の下」の力持的「環境対策」を世に広めたいと考えている。



- ▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。
- ▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



トップ
ページへ
戻る



第14回 (2008年1月25日 15時51分公開) 「黄海エコリージョン支援プロジェクト」とは!? (続編)

前回紹介した世界自然保護基金 (WWF) の「黄海エコリージョン支援プロジェクト」。具体的な内容にあまり触れられなかったため、今回も引き続きこのプロジェクトについて。

2007年から2014年までの長期間に渡って実施されるこのプロジェクトは、目的別に次の3つの期間に分けられている。

第1ステージ (2007年8月～2010年3月)

中国と韓国から、「黄海エコリージョン優先保全地域マップ」に基づく優先保全地域が含まれる都市単位での保全活動を公募し、実施を支援する。それぞれの地域における経験や情報を交換する機会を設け、情報の共有を図る。

第2ステージ (2010年1月～2013年3月)

中国・韓国に1カ所ずつモデル地区を設けて、地域の特性に合った自然環境の保全を行う。地域社会と協働で、どのような生態系の管理を行うことが適切かを考え、実施する。

第3ステージ (2013年4月～2014年9月)

これまでの活動の評価を行い、出版や発表等を通じて中国・韓国をはじめ世界にその成果を発信する。

まとめてしまえば、第1ステージが啓蒙活動期間、第2ステージが実行期間、第3ステージが普及期間と位置づけられるだろう。それにしてもなぜこれほど長期間のプロジェクトとなったのだろうか？ また「保全活動を公募する」とあるように、このプロジェクトの主体は地域住民で、WWFの役割は、あくまで地域住民の環境活動をサポートすることだ。その狙いはどこにあるのだろうか？ WWF ジャパン広報部の佐久間浩子さんとプロジェクト担当者の東梅貞義さんにお話をうかがった。

「今回のプロジェクトは、黄海で漁業を営んでいる人たちや地元の人たちに、より環境問題について関心を高めてもらうことを目的としています。私たちが現地に行って活動するだけならすぐにできますが、4～5年だけ活動して、その後続ける人が誰もいなくなってしまうたら元も子もないですよ。持続的な保全活動を続けるためには、我々ではなく地域の人たちが主体となって環境活動に参加することが必要不可欠なんです」(佐久間さん)

「具体的には、特定の民間団体を通してだけでなく、市役所レベルの地域自治体とも協力しながら、地元住民の方たちと一緒に保全活動を展開していく予定です」(東梅さん)

また、今回のプロジェクトには、2000年からおこなわれてきた「有明海プロジェクト」で培ったノウハウが活かされる予定だ。前回も少し触れたが、有明海も黄海と同じく豊かな自然を育む干潟の減少が深刻化していた。その保全のため、WWFジャパンは、こちらも松下電器産業の協賛をえながら、さまざまな支援活動をし続けてきたのだ。佐久間さんによれば、とりわけ佐賀県鹿島市の環境保全活動がモデルになるという。

「『有明海プロジェクト』を推進して行く中で、2004年に鹿島市で『水の会』という環境市民グループが立ち上がりました。鹿島市長さんもこの会の活動について理解を示して協力していただいたので、地域ぐるみで活動し続けていくことができたんです。住民の自主的な発案から立ち上がった『水の会』の取り組みは今回のプロジェクトの参考にもきっとなると思います」(佐久間さん)

「環境保護団体だけでは環境保全はおこなえません。このプロジェクトを通じて地域の人たちが主体となって長期的に環境活動をおこなえる下地をつくることができると考えています。その結果、地域の持つ『誇り』に少しでも世界が気付いてほしいですね」(東梅さん)

3カ国共同のプロジェクトであるだけに、調整の苦勞も絶えないというが、地道な黒子の支援活動が、7年後にどんな実を結ぶのか非常に楽しみだ。

今日のエコの芽 まずは現場の意識改革から



ライター：小林ミノル
1975年大崎生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まぎながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「縁の下」の力持的”環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。



トップ
ページへ
戻る



第15回 (2008年2月1日 10時00分公開)

パナソニックセンター大阪に使用済みてんぷら油を持って行ってみた！（1）

大阪市中央区の大阪ビジネスパーク・ツイン21内にある**パナソニックセンター大阪**。新製品の紹介や、ユビキタスネットワーク・環境といったショウケースごとの展示とともに、デジタルカメラ講座、館内ガイドツアー、エコバッグのお絵描き工作イベントなど、子供から大人までを対象にしたさまざまなイベントを開催している。



子供たちを対象にした「エコバッグお絵描き工作」の模様
(2008年1月5・6日)

そんななか、パナソニックセンター大阪独自の試みとして注目を集めているのが、使用済みてんぷら油の回収だ。同社の滋賀県草津工場では、社員食堂から出た使用済みてんぷら油を回収し、路線バスのバイオディーゼル燃料として再利用しているが、こちらでは、センター来場者に家庭で使用したてんぷら油を持ち込んでもらい、それを民間の回収業者に引き取ってもらうというキャンペーンを昨年6月から続けている。いったいどのような経緯から、この使用済みてんぷら油の回収運動はスタートしたのだろうか？

「普段環境活動に関心があっても、参加する機会ってそれほど多くないと思うんです。そこで昨年6月の環境月間に、参加型のイベントはないだろうかということで、考案した企画です。最初は使用済みの割り箸を集めようという話にもなったんですが、ちょうどツイン21内の飲食店から出る使用済みてんぷら油が定期的に回収されていることを知り、その回収システムを利用させてもらえるよう交渉したところ、OKが出たので、始めることができました」
(パナソニックセンター大阪 運営マーケティングチームの木村香子さん)

使用済みてんぷら油の回収をおこなっているのは、レポインターナショナルという京都の会社だ。2007年に、片山右京氏が使用済みてんぷら油を原料にして製造されたバイオディーゼル燃料「C-FUEL」を100%使ったクルマでパリ・ダカールラリーを走走したが、その燃料供給を行っていたのが同社である。このキャンペーンは断続的に続けられ、4カ月の開催期間中約150人の来場者がペットボトルに使用済みてんぷら油を持ってセンターを訪れてくれたという（通常は、500mlが多いが、1500mlのペットボトルに入れて持って来た人もいたとか！）。



使用済みてんぷら油の回収キャンペーンを担当しているパナソニックセンター大阪の木村さん

「小さいお子さんがいるご家庭では、フライや唐揚げなどが食卓に上るので、てんぷら油の出番って案外多いですよ。ボーイスカウトやガールスカウトの人たちがグループで見学に来たときに、何十人とペットボトルに入れて使用済みてんぷら油を持ってこられました。今後は全社的な取り組みにしていき、近い将来には、自治体と協力して、この使用済みてんぷら油を使ったバイオディーゼル路線バスを、大阪市内で走らせられたらいいですね」（木村さん）

パナソニックセンター大阪では、さまざまな参加型イベントを今後も開催していきたいとのこと。環境活動においては消費者側からの地道でありつつも積極的なアプローチが必要不可欠だ。なので、近くに住んでいる方はぜひ参加してみたいかがだろうか？ ちょっとした日常の行動が環境活動につながることを実感できるはずだ。

今日のエコの芽

見学だけでなく参加もしてみよう！



ライター：小林ミノル

1975年大晦日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「縁の下の力持ち的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。
～モノづくり企業のエコ意識～



トップ
ページへ
戻る

ism トップ > WIRED VISION 発 それは現場で起きている。 ～モノづくり企業のエコ意識～ > 第16回 パナソニックセンター大阪に使用済みてんぷら油を持って行って見た！（2）

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

2008年9月23日公開

（このコンテンツは、2007年10月～2008年5月までWIRED VISIONで連載した内容を一部再編集したものです。）

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



第16回 (2008年2月5日 11時30分公開)

パナソニックセンター大阪に使用済みてんぷら油を持って行って見た！（2）

というわけで、実際、筆者も取材前夜に自宅でトンカツを揚げ、そのときに発生した使用済みてんぷら油を、パナソニックセンター大阪に持って行って見た。



(1) トンカツは外食か弁当のおかずで食べるものと思っていたのだが、人生初の自家揚げに挑戦！



(2) 付け合わせやみそ汁などもついでに料理し、器に盛って食べる（初めてにしては上手くできたかも）



(3) トンカツを食べ終わり片付ける。ペットボトルに使い終わったてんぷら油を移す



(4) 翌日、ペットボトルを持って、パナソニックセンター大阪に向かう（最寄り駅は大阪市の京橋駅だ）



(5) 受付のスタッフさんに、てんぷら油の入ったペットボトルを渡すと、笑顔で受け取ってくれた



(6) 使用済みてんぷら油を渡した代わりに、エコバッグと環境カレンダーをプレゼントしてもらう



(7) その後、油は地下のスペースにまとめられ回収される。今度は燃料として役に立ってこいよ～！

今日のエコの芽

参加することの充実感、悔りがたし！



ライター：小林ミノル

1975年大晦日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「縁の下の力持ち的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



トップ
ページへ
戻る

WIRED VISION発

それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

第17回 (2008年2月21日 10時08分公開)
生水の郷エコツアー参加レポート（1）

滋賀県高島市新旭町。琵琶湖の西岸に位置するこの町は、日本一大きな湖の沿岸という土地柄、豊富な湧き水がそこに住む人々の生活基盤であり続けた。とくに町内北部の針江地区は、この湧き水を「生水（しょうず）」と呼び、飲料水として利用するのみならず、江戸時代から続く「川端（かばた）」という生活用水システムを守ってきたことで有名だ。この川端は、用水路を自宅まで引いて貯水池をつくり、炊事洗濯などの水仕事すべてをそこで行うというものだ。しかも、各家の川端には、数匹の鯉や鮒が飼われていて、食器や鍋についた食べ残しや切り落とした野菜くずなどをついばんで掃除してくれるのである。他の地区にも高度経済成長期前までは川端があったのだが、経済的な発展とともに消えてしまい、地域として利用し続けているのはこの地区だけになってしまったそうだ。

同地区では、2004年から各家の川端を見学するエコツアーを開催している。そこで自分も、パナソニックセンター大阪への取材の帰りがてら、この「生水の郷ツアー」に参加してみた。

冬晴れとなったツアー当日の午後1時、集合場所に指定されている針江公民館前に到着すると、すぐ目の前をきれいに整備された川が流れていた。看板を見ると針江大川と書かれている。陽光がきらきらと水面に反射し、川の中央では清流にしか生育しない梅花藻がゆらゆらとそよいでいた。川に沿って流れてくるピリッとした空気が気持ちいい。



針江地区の中心部を流れる針江大川。水も澄んでいるが、川自体もキレイに整備されている



公園脇の水路に設置されていた水車。残念ながら、季節的な水位の低下のせいで回ってはいなかった

しばらくそこで待っていると、針江水の郷委員会の福田千代子さんが現れた。この日のガイドを担当していただく方だ。平日ということもあり、滋賀県内から来た女性の方とともに、2人でのツアー開催となった。

この「生水の郷」ツアーは、約1km²ある針江地区をおよそ2時間かけてぐるっと一周しながら、川端のあるお宅や、お寺や地元の商店などを見学して歩くというものだ。福田さんによれば、区内にはおよそ107の川端が存在し、それぞれに個性があるのだという。

最初にうかがった川沿いのお宅の川端は、「外川端」と呼ばれるアウトドアタイプのものであった。家の庭先に屋根付きの小屋があり、そのなかに川端がある。中をのぞいてみると、鍋や爪が整頓して置かれていた。よくみると歯ブラシもある。台所と洗面所の機能がすべてここでまかなわれているのだ。そして池の中には鯉が数匹のんびりと泳いでいた。



外川端の外観。庭の入り口にあり、すぐ脇の用水路から湧き水が出ている。左側がガイドしてくれた生水の郷委員会の福田さん



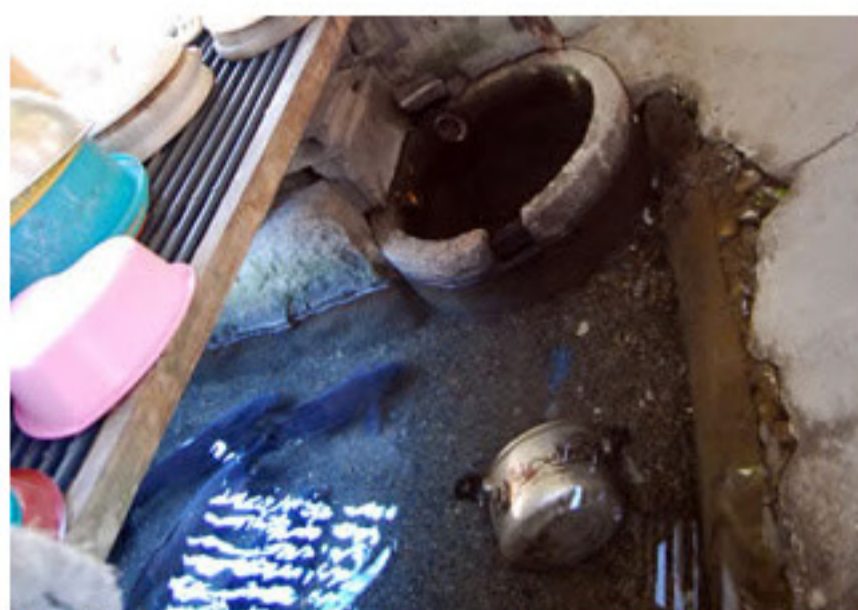
川端の内部。洗面器や洗剤、タワシ、スポンジのほか、歯ブラシも置かれている。池の中では鯉が数匹泳いでいた

地元では、地下水が湧き出る場所を「元池」、野菜や顔などを洗う場所を「坪池」、食器などを洗浄するところを「端池」と呼んでいる。上の写真でいうと、右側の正方形に囲まれた部分が坪池で、その回りが端池だ。湧き水が出る元池は、ちょうど川端の裏側にある。

続いて二軒目のお宅にうかがった。こちらは、「内川端」である。勝手口から覗かせていただくと、漬け物の樽や野菜が置かれた縦長の土間の脇に川端があった。川端には鍋がぶかぶかと浮かんでいて、ご飯粒を鯉がついばんでいた。



勝手口脇にある内川端。奥には漬け物樽や鍋もあり、川端が台所と一帯となっていることがよくわかる



大きな鯉が鍋の中のご飯粒をついばんでいた。丸いところが坪池でその回りが端池だ

人間と鯉の持ちつ持たれつこの関係。なにかに似ていると思ったのだが、ホンソメワケベラと、彼らに掃除してもらって大型の魚の関係に近いのかもしれない。補食する側と補食される側にもなりうる関係なのにもかかわらず、お互いの役割を果たしながらWin-Winの関係で共生している。川端を実際に見て、人もこうやって他の生物と共に生きているのだなあとしみじみ納得してしまった。

今日のエコの芽
魚と人のWin-Win関係を見た！

ライター：小林ミノル

1975年大崎白生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業「緑の下の力持ち的」な環境対策を世に広めたいと考えている。

▶ [「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。](#)▶ [WIRED VISIONのサイトはこちら。](http://wiredvision.jp/)
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

トップ
ページへ
戻る



第18回 (2008年2月26日 17時36分公開)

針江生水の郷エコツアー参加レポート（2）

我々ツアー一行（といっても3人だけ）は、それから川沿いに下流（琵琶湖に近づいていくことになる）に向かって歩き、その他の個性的な川端や古くからある曹洞宗のお寺、100年間生水（しょうず）を使って豆腐をつくっている豆腐屋さん、敷地内の湧き水を通りがかりの人にも自由に飲めるようにしてくれているお宅などを見て回った。いまはもう使われていない共同の川端というものもあった。

ツアーは、琵琶湖近くの川端を拝見した後、また地区の中心に戻って、川端生活を体験できる宿泊施設を見学したところで無事終了した。すでに時計は午後3時を過ぎ、我々の影も長くなりはじめている。公民館の脇の公園では、学校帰りの地元の小学生たちがブランコに乗って遊んでいた。

このツアーは、いまから4年前の2004年から開催されている。きっかけは、その年の1月にNHKの特集番組でこの川端が大々的に紹介されたことだった。番組は反響を呼び、多くの人が見学に訪れるようになる。しかし、その一方で問題も発生した。無断で川端を見学に来る人が増えてしまったのだ。訪問者にとっては単なる見学のつもりでも、地域の人にとってみれば、各家庭の生活の場である川端を勝手にのぞかれることになる。今回のツアー中にも、勝手な見学を注意する張り紙がいくつか貼られていた。

そこで、福田さんたち地元の有志が中心となって「生水の郷委員会」を立ち上げ、エコツアーを開催し、訪問者を制限することにしたのだという。その一方で、ガイドを地元の人たちから募って受け入れ態勢を整えたり、梅花藻を植え、年4回の掃除をおこなうなど、川や用水路の整備を続けたりもした。また、実際の生活を体験できるように宿泊施設を整える一方で、地域の商工観光課や教育委員会と協力して、川端文化を外部に発信するようにした。その結果、ツアー参加者は年々増え、去年だけで、なんと7000名もの訪問者がツアーを通じて針江地区を訪れたという。小中学校からの団体客も多く、100人以上の場合は、地元の老人会の方がボランティアでガイドをおこなっているそうだ。さらに、国内のメディアだけでなく、韓国、中国、オーストラリア、ドイツのメディアからも取材を受け、昨年には、当時の安倍首相が見学に訪れたそうだ。

「ツアー開始当初は、こんなに注目されるとは思っていませんでした。私たちにとっては、水を使うことが当たり前だったんです。でもツアーを通じて、川端文化を紹介することで、私たちとしても川端の大切さを再確認ができたと思います。また、ツアーを通じて地域全体が元気になりましたね。老人会のみなさんも協力していただいていますし、子供たちからも元気な挨拶が返ってくるようになりました」（生水の郷委員会の福田さん）

加えて、ツアーの参加費は1人1000円とそれほど高くはないものの、7000名ものツアー客が訪れるとなると、地域経済にも多大な貢献を果たすことになる。これらの収益金は、地域通貨などによって地元の人々にも還元されているそうだ。地域の財産を紹介するこのツアーが、一部の人のみだけでなく、地域全体で運営、応援されていることがうかがえるエピソードだ。

今回、この「生水の郷ツアー」に参加して感じたのは、地域が川端というシステムを通じてずっとつながってきたということだ。福田さんによると、地区には、地下24m付近に3つの水脈があり、この水脈に沿って井戸を掘ると湧き水が湧き出てくるそうだ。そして、古くからの家は、この水脈に沿って並んでいる。井戸を掘るにもルールがあり、近隣の湧き水が濁れてしまわないように、周囲の承認を取って計画的に掘ってきたのだという。そのため、すべての家に湧き水の出る元池があるわけではない。上流から下流に坪池の水を流すこともある。ということは、もし上流の家が川端をきれいに使わなければ、下流の家で使う水が汚れてしまうことになる。現在我々が各家庭で生活用水を使うとき、使用代金を「公共料金」と呼びつつも、それが公共のものであるとはっきり意識することはめったにない。しかし、針江地区では、今も昔も水は各家庭のものであると同時に共同のものであった。この地域の人々は、日々水の公共性を意識しながら暮らしてきたのだ。用水を通じた共同体の連帯感が、江戸時代からここにはずっと残っているのである。この、近隣の人たちに迷惑をかけないように気を配るという意識こそ、エコの原型なのではないだろうか？

エコツアーなんて、単なる参加者の自己満足じゃないかという批判もある。しかし、他の旅行と同じように、あるいはそれ以上に発見したり気付かされることもある。自分自身、このツアーに参加して、川端文化に素直に驚くと同時に、普段なげなく使いがちな排水処理やゴミ回収などの公共システムが、自分の家を出てからどんな流れを辿って処理されるのか想像力を働かせながら、いわゆる「3R」をより心がけて生活しようと、改めて思わされたのだ。

今日のエコの芽 使い終わった先への想像力を働かせる

ライター：小林ミノル
1975年大崎日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「緑の下の力持ち的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。
モノづくり企業のエコ意識



トップ
ページへ
戻る



あるお宅の外川端には、料理後のまな板がつけられていた。下を除いてみるとやはり鯉が泳いでいた。



鳥がこないようにネットが張られている川端。琵琶湖に近いこのお宅の川端が地域でもっとも水量が豊富ならしい。



創業100年という上原豆腐店の豆腐。元池から流れてくる冷たい湧き水で美味しく冷やされている。



川端生活を体験できる宿泊施設「生水の生活体験処」。昔が飛び初夏にはとくに大勢の宿泊客が訪れるという。



第19回 (2008年3月24日 21時37分公開) METECツアー同行記（1）

兵庫県加東市にMETECという会社がある。正式名称は松下エコテクノロジーセンター。リサイクル事業に特化した松下グループの静脈企業だ。2001年4月、家電リサイクル法の施行とともに設立された同社では、リサイクルが定められている家電4製品、すなわちテレビ、洗濯機、エアコン、冷蔵庫のリサイクル事業をおこなっている。

家電リサイクル業界では、リサイクルされる製品を、製造会社別にAとBの2グループに分けている。松下電器や東芝を中心とした製品群がAグループで、シャープやソニーの製品群がBグループだ。METECが取り扱っているリサイクル製品は、近畿2府4県から集められたAグループの製品である。同社の年間の処理台数は、2001年が56万台、2002年が64万台、2003年からは67万～70万で推移しているという。これは日本で1年間にリサイクルされている廃棄家電製品のおよそ5～7%に相当する（中央環境審議会廃棄物・リサイクル部会家電リサイクル制度評価検討小委員会の発表によると、リサイクル家電の総数は、2001年が855万台、2002年が1015万台、2003年以降は1046万台から1161万台の間で推移している）。

また、同社は堤常固社長の方針によって、創業時から「魅せる工場」を標榜してきた。「リサイクル」が持つイメージをより明るいものにしようと、工場のラインを色分けしたり、見学通路を設立時から設け、多くの見学者を受け入れてきたのだ。また、地域社会との交流も積極的におこない溶け込む努力も続けて来たという。そしてこの試みは実を結ぶ。地域の人々から「地元の人にだんだん近づいてきた」と認められるとともに、地元の小中学校から海外のメディアまで、毎年1万人以上の見学者が同社を訪れるようになったのだ。

しかし、METECがどんな工場なのかは実際に訪れてみないとわからない。2月15日、松下電器が「eco ideas ツアー」と銘打ってMETECの見学ツアーを開催するというので、自分も同行し、この目でMETECのすごさ確かめてみることにした。



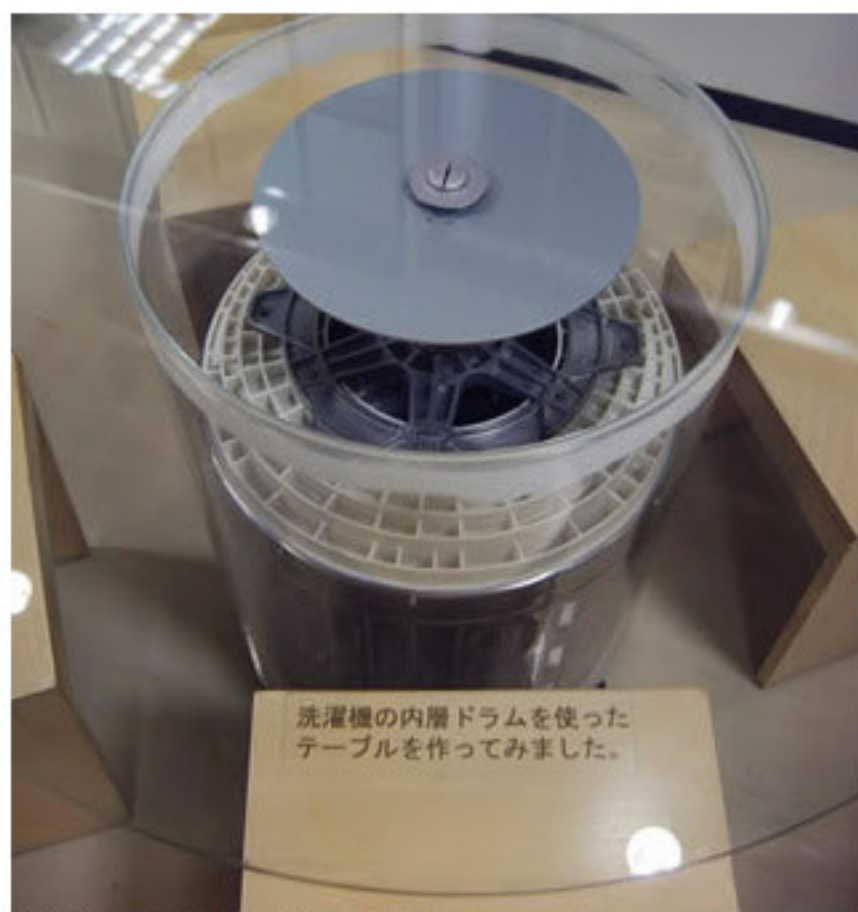
2台のバスに分かれて一路METECへ！

当日のツアー参加者は24名。2台のバスに分かれて大阪駅からMETECまで向かう。移動中のバス車内では、ガイドのお姉さんが出題するエコにまつわるクイズに回答したり、METECの紹介ビデオを見て予習をしたりしながら過ごした。そして、およそ1時間半後、ついに我々はMETECに到着する。



兵庫県加東市にある松下エコテクノロジーセンター。

さっそく、玄関から建物に入って2階に上ろうとすると、階段の壁に絵が描かれていることに気付く。社員の方に質問したところ、使い終わった家電製品が、家庭からMETECに辿り着くまでを、神戸の街からMETECまでの道のり、風景になぞらえているのだそう。METECのある兵庫県への感謝の表れでもあるのだろう。さらに荷物を置こうとしたテーブルの脚部分には、なんと洗濯機のドラムが使われていた。出だしからMETEC全体のリサイクルへの熱意が伝わってくるディテールの細かさだ。そして2階の壁には、社会見学にMETECを訪れた小学生たちのお礼状が一面に張られている。短い文章ながらどの手紙もMETECを見学した子供たちが、本当に驚いたことが伝わってくるような文章だった。そういえば、自分が小学生だった頃も、工場見学は驚きの連続だった気がする。耳問でしかなかったものを実際に見て体験したときの新鮮な驚きは、大人になっても変わらないはずだ。早く工場の内部を見学したくて久しぶりにワクワクしてきた。



洗濯機の内層ドラムを再利用したテーブル。



今日のエコの芽 大人も子供も百聞は一見に如かず



ライター：小林ミノル
1975年大崎日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに連まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「縁の下力持的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION発
それは現場で起きている。
～モノづくり企業のエコ意識～

トップページへ戻る



第20回 (2008年3月26日 11時15分公開) METECツアー同行記（2）

会議室での堤常固社長の挨拶と社員の方の説明の後、いよいよ工場見学となった。社員の方の解説を聞きながら、ライン別にカラフルに色分けされている作業現場を見学していく。

2階の見学コースを歩いていくと、まず目に飛び込んで来たのはピンクで統一されたテレビの解体ライン。1階のラインでは、作業員の人が筐体から四角い漏斗のようなブラウン管をひとつひとつ手作業で取り出していた。ブラウン管はその先ではさらにまっばらつづつ分割されている。パネルガラスとファンネルガラスという2種類のガラスでできているブラウン管を再分割することで、再利用しやすくしているのだ。ブラウン管に熱を加えて割るこの技術は、松下グループが開発実用化したものでヨーロッパにも輸出されているという。



テレビの筐体からブラウン管を取り出している。

続いて水色の洗濯機のラインを見学する。ドラムの周囲に穴をあけている人がいる。何をしているのだろうかと思ったら、バランスを取るために注入されている塩水を抜き出しているのだそう。しかもこの塩水は、水分をとばして塩の結晶になるのだという（現在のところ用途はまだ検討中とのことだが、塩水までリサイクルしようという熱意には感服してしまった）。塩水を抜かれた洗濯機本体は、ゴトゴトとベルトに乗って巨大な破砕機の中に送り込まれている。この巨大な青い箱のなかで、洗濯機は、細かく砕かれ、磁力・風力によってプラスチックと鉄類に分類されているのだ（破砕されている映像を見せてもらったが、かなりの迫力！）。



洗濯機が破砕機にまさに送り込まれようとしている。

そのまま隣の棟に移動すると、今度は黄色いエアコンラインと緑色の冷蔵庫ラインが通路の左右に広がっている。エアコンは、室外機と室内機がそれぞれ別のライン上で分解されている。コンプレッサーと熱交換器がそれぞれ破砕機に送り込まれ、筐体は洗濯機ラインに移動して破砕されるそう。冷蔵庫ラインでは、手作業で電源コードや庫内容器、コンプレッサーが取り出されていた。内部の部品を取り出された本体が、順に専用の破砕機に送り込まれている。



識別しにされた冷蔵庫が破砕機に流れていく。

各ラインが一望できる2階から見ると、4種類の家電が整然とベルトに乗って移動し、分解されているように見える。大型家電がベルトに乗って巨大な破砕機に順に送り込まれる様はすこくシステマチックだ。



エアコンの室外機と室内機が別々に分解されていく。

ところが一旦控え室に戻った後、再度撮影のために特別に1階から見学させてもらおうと、工場の別の側面が見えて来た。2階からではあまりわからなかったのだが、間近で見ると、ラインに乗っている製品の種類が、大きさもメーカーも本当にばらばらなのだ。



形も大きさもバラバラの冷蔵庫。

コンプレッサーなど部品の大きさもバラバラだ。作業する人は、それをひとつひとつ分解し、選別していかなくてはならない。後でうかがったところによると、足がついている30年前に製造されたテレビ（！）なども引き取られてくるそう。その場合は、専用の台で解体するのだという。



冷蔵庫のコンプレッサーを分解している。

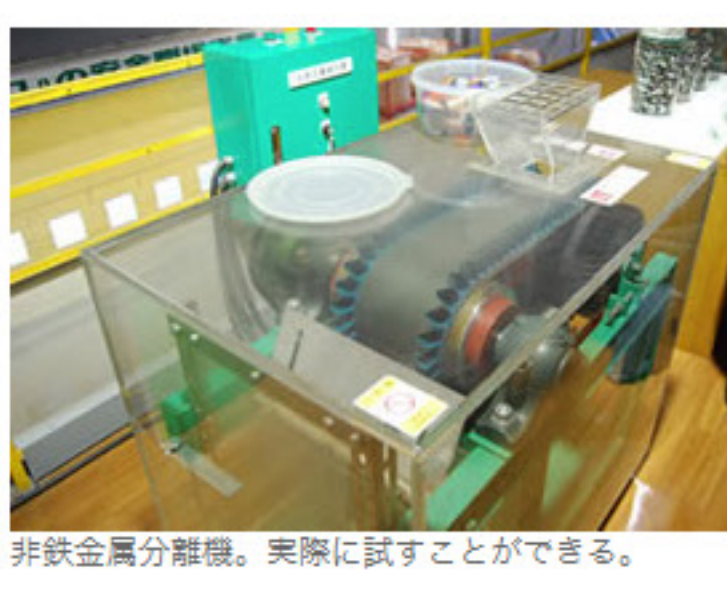


洗濯機からコンデンサーを取り出している。

整然とラインが動いているなかで、ひとつひとつの作業は担当者が製品にあわせて細かく判断して作業をおこなっている。瞬時に判断しなければならぬはずだ。METECは、無駄を排除したシステムと最先端の技術、そして臨機応変な人間の判断力のコラボレーションによって、成り立っている工場なのだ。

今日のエコの芽 リサイクルは技術と人の共同作業

見学通路に展示されていたもの



非鉄金属分解機。実際に試すことができる。



中身入りのまま回収された冷蔵庫（処理に困る）



分類して取り出された金属類も展示されていた。



「エコプロダクツ2007」の会場から持ち帰ったリユースザリガニオブジェ。

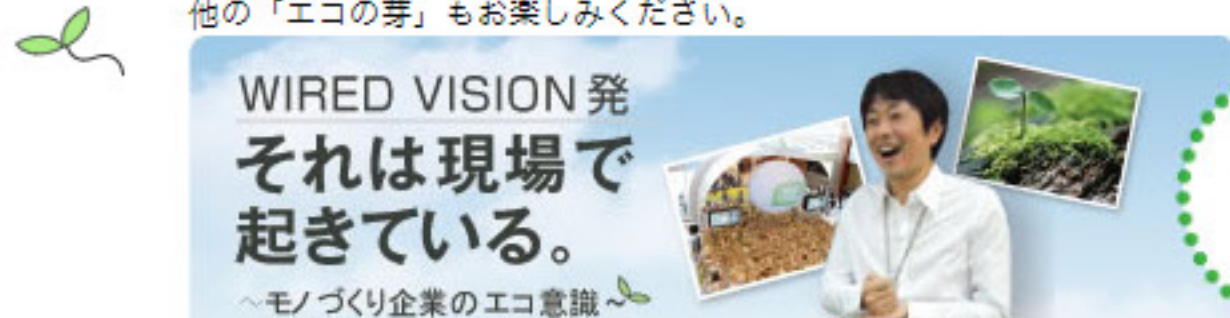
ライター：小林ミノル
1975年大崎生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに感銘を受けながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「徳の下の力持ち的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。



トップ
ページへ
戻る



第21回 (2008年3月28日 11時03分公開)

METECツアー同行記（3）

昼食の後、「ソックモンキーの手作り教室」がはじまった。「ソックモンキー」は、靴下に綿を入れてつくられたかわいい猿のぬいぐるみのことだ。1920年代の大恐慌時代のアメリカで、シカゴに住むおばあさんが、孫のために使い古しの靴下を使ってつくったのが始まりだといわれている。松下電器では、このソックモンキーの再利用の精神が、エコにつながると考え、テレビCMなどを通じて紹介している。今回の手作り教室もその一環として、ツアーに組み込まれたものだ。我々ツアー参加者は、講師の武井千米子先生のアドバイスを受けながら、約2時間、オリジナルソックモンキーの製作に没頭した。



ソックモンキーの作り方を解説する武井先生。

ソックモンキーをつくりながら、自分の席の前に大学生のカップルがいたので、このツアーに参加した理由などを質問してみた。2人とも京都在住で、就職活動中の彼女が彼を誘って参加したのだという。

「松下電器のホームページを読んでいてツアーがあることを知り、応募したんです。松下電器がユビキタス技術と環境活動に熱心に取り組んでいることは知っていたのですが、今回ツアーに参加したことで、世界的な企業がどのように社会的責任を果たしているのか、具体的な取り組みがわかってよかったです」

そう語る彼女の横で彼がもくもくと綿を靴下のなかに詰め込んでいる（ちょっと頭が大きい個性的なソックモンキーができあがりつつある）。彼にも話を聞いてみた。

「僕は、彼女に誘われるまで松下電器が環境活動に取り組んでいることを知らなかったんですが、このツアーを通じてその熱心さがわかり、びっくりしました。今度は逆に、他のメーカーがどれくらい環境活動に取り組んでいるのを知りたくなりましたね」



京都在住の大学生の2人。相談しながら製作していた。

今回のツアーの狙いについて、同社宣伝グループ企業宣伝チーム主事の後藤真佐美さんは次のように語る。

「今回のツアーは、松下グループの環境への取り組みをより多くの方々に知ってもらうために企画しました。そのために、さまざまな環境の取り組みの中でも、お客様に身近に感じていただける『家電リサイクル』をテーマとすることにしました。リサイクル事業をおこなっているMETECを見学していただくのが、一番効果的ではないかと考えたのです。今回だけではなく今後も続けて開催していきたいですね」

一方、同社環境本部の富田勝己さんは、企業と消費者の関係をこういったイベントを通じてより深めていきたいと言う。

「環境問題の改善には、消費者と企業の協力関係が不可欠です。今回はウェブや雑誌などのメディアで参加者を募集し、性別や年齢を問わずいろいろな層の方に参加してもらいました。消費者の方の意見もうかがって一方的なものにならないよう気をつけながら、今後も情報発信を続けていきたいと思います」

ツアーには、そのほか、お母さんを誘って参加した20代の女性や夫婦で参加された方、赤ちゃんを連れて参加された方もいた。そしていずれの参加者もソックモンキーづくりをエンジョイしていた。ソックモンキーには、いまあるものを使って楽しもうという思想がある。エコ活動が大切なことはもちろんだが、その活動が楽しくおこなえるものであればなおさらよいと思う。そういった意味で、僕も含め、この「エコアイデアツアー」に参加した人たちは、エコの持つ楽しさを十分に感じたのではないだろうか。



参加した人たちがつくったソックモンキーたち。

追記

結局取材のために時間が取れずに作りかけになってしまっていたソックモンキーを、帰宅してから完成させてみた。いつもエコに気を配っているかどうか見守ってもらうためにリビングに置いてある。



今日のエコの芽 何事も楽しむことが大切



ライター：小林ミノル
1975年大崎生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに遠まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「縁の下力持的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。



トップ
ページへ
戻る



第22回 (2008年3月31日 10時55分公開)

METECツアー同行記（4）

ソックモンキーの手作り教室」が終わった後、METECの現場で働いている人たちに話をうかがうことができた。忙しい中時間を割いて取材に応じていただいたのは、METEC開発部長の富田和之さん、本社生産革新本部からMETECに駐在している内海省吾さん、テレビラインのリーダーである秋園博文さんだ。

METECで働き始めて6年という秋園さんは、リーダーとして、正しい手順で安全に作業ができるよう作業員のフォローをしながらラインを見て回ることが仕事だという。経験とカンを駆使しながら、アドバイスをしたり不測の事態の予兆を見つけ出し回避するのだ。当然のことながら、この仕事は経験豊かなベテランでないとできない。「テレビの解体作業」と一口にいっても扱うテレビは、メーカーや大きさによって形も構造もまちまちだ。ということは、きっと作業のコツも無数にあるはずだろうし、新人とベテランでは、ずいぶんと仕事の仕方に差が生じるはずである。

「もちろん作業を習熟するには時間もかかりますし、道具を扱うセンスも必要です。我々としては1人で3工程くらいできたら一人前だと言っています。自分の前の行程を知っていたら、前の行程の担当者の大変さがわかり、後ろの行程を知っていれば後ろの行程の担当者の作業を楽にさせる工夫ができる。ライン全体のスピードアップにつながりますし、品質も上がります」（秋園さん）

また、METECは「トレジャーハンティング」（宝探し）というスローガンを掲げ、現場からの積極的なラインの改善案や意見を推奨している。現場の提案は、どのように会社に取り入れられているのだろうか？

「なにげない会話から意見が取り入れられることもありまして、ラインのミーティングで意見をまとめることもあります。社長宛の意見箱がいろいろなところに置かれているので、そこに意見用紙を直接投函することもできます」（秋園さん）

そして、秋園さんから現場の人々の要望を受け入れながら、ラインの改善を担当するのが、富田部長率いる開発部門だ。

「現場の改善は開発部門のミッションのひとつです。働く人に負担をかけないで作業効率を上げるために、製品を持ち上げる高さなど、微調整を日夜繰り返しています」（富田部長）

現場の改善とともにリサイクル技術の先行開発も開発部門のメインミッションのひとつだ。製品のリサイクル率を少しでも上げるために、分離手段などの研究を続けている。また、今後、家電リサイクル法の改正によって、新たにリサイクルが義務づけられる薄型テレビや乾燥機の解体研究も急ピッチで進められているそうだ。

「とくに薄型テレビは、解体するのに新しい工法が必要なので、あらゆるケースを想定し、試行錯誤しながら実証試験を続けています」（富田部長）

これまでにMETECは、ブラウン管の高速分割、コンプレッサーの常温破碎、熱交換機の銅・アルミ高純度分離など68件もの特許出願を行っている。2月26日に発表されたばかりの画期的な「触媒反応による有機物リサイクル技術※」も、METECの独自技術のひとつだ。

そして、日々繰り返される研究開発から生まれたこれらの技術やノウハウは、松下グループ全体に積極的にフィードバックされている。そのパイプ役を担っているのが、本社生産革新本部から駐在している内海さんだ。

「『解体実証活動』と私たちは呼んでいるのですが、グループ内の製品設計者に来社してもらい、担当している製品の解体実証や、ライン作業を経験してもらっています。設計者の方に身をもって解体作業の大変さを実感してもらえます。我々が先方に向いて実証をすることもありますよ。こういった活動を通じて、開発・設計者のリサイクルに対する意識も変わってきていると思います。かつては10種類以上の樹脂がテレビの原材料に使われていましたが、現在では3～4種類まで減ってきていますし、分離不可能な金属とプラスチックの混合物も徐々に減ってきています」

METECは、家電製品を分解して再利用するのみならず、商品開発設計部門へのフィードバックをおこなうことで、松下グループ全体のリサイクル効率性をさらに高めている。秋園さんの言う「自分の前の行程を知っていたら、前の変更がわかり、後ろの行程を知っていれば後ろの作業を楽にさせる工夫ができる」というのは、ラインの話であるとともに、モノづくりの基本でもあり、さらに大きく言えば、消費者が循環型社会をつくるために常に意識しなくてはならない課題でもあるのだ。

※この技術によって、樹脂で覆われた配線や金属が混入した樹脂から金属だけを回収するとともに、焼却や埋め立て処理されていた混合プラスチック材を安全にガス化できるようになった。しかも、自己反応熱で処理されるため、外部からのエネルギー供給もほとんど不要だという。

今日のエコの芽

前のありがたさと後ろの大変さを理解する



ライター：小林ミノル
1975年大崎日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「縁の下」の力持ち的「環境対策」を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



トップ
ページへ
戻る



第23回 (2008年4月1日 10時58分公開)

METECツアー同行記（5）

METECツアーシリーズの最終回は、堤常固METEC社長へのインタビュー。堤社長には、会社設立の経緯について、これまでの取り組みについて、そしてリサイクル事業の未来について、熱くかつ率直に語っていただいた。



堤常固（つづみのふたか）松下エコテクノロジーセンター社長。1970年に松下電器に入社して以来、一貫して生産技術本部（現生産革新本部）で、国内外の工場合理化に関わる。98年、本社リサイクル事業推進室に異動。2000年4月にMETEC社長に就任。松下グループ内のリサイクル企業トップとして重要な役割を果たすとともに、リサイクル産業全体の地位向上に努める。

——METEC設立の経緯についてうかがわせてください。

堤 家電リサイクル法の製造者責任を果たすために2001年の4月に、松下電器の100%出資会社として設立しました。私はそれまで松下電器の生産技術本部にいて、半導体や液晶製造工場のプラント建設にずっと携わっていました。もっともゴミを嫌う部門だったわけですが。ところが1998年に、リサイクル部門への異動の辞令が出た。正直これまでと180度違う部門だったから、「どうして俺なんだろう？」と思いましたね。でも、「チャンス」「ギアチェンジ」そして「チャレンジ=3C」という言葉が好きだったので、挑戦してやろうと。METECを設立するにあたって、まず最初に考えたのは、リサイクルのイメージを変えるということでした。リサイクルというのは、「ものを捨てるのではなく、ものをつくりだすことである」という方向性を打ち出したんです。

——それが「商品から商品へ」という基本理念につながるわけですね。見学して感じていたのですが、METECは、最先端の技術を導入しているとともに、働いている人の顔が見えて、工場全体が非常に明るい印象を受けました。

堤 工場全体の雰囲気をよくするためにはどうするのかを、常に考え続けていますから。たとえば、階段の壁に絵が描かれていますよね。普通の会社ならそんなことはしません。4種類のラインを分けているそれぞれ色も勝手に塗ったわけではなく、商品コンセプトと全体のバランスのもとに選んであるんです。

——「トレジャーハンティング」というキャッチフレーズも、そこから生まれたのでしょうか？

堤 働いている人たちが能動的に仕事に関わり、現場から積極的に情報をフィードバックすることをMETECでは奨励しています。なぜなら、リサイクル技術を開発、工程を改善し事業を効率化していくためには、現場が困っている問題をひとつひとつ解決していくことが大切だからです。そして現場からあがってきた解体しやすい・解体しにくいといった情報は、松下グループの商品開発設計部門へフィードバックされ、新商品開発にいかされています。

——リサイクルというとゴミやホコリが発生するイメージを見学前は勝手に抱いていたのですが、マスクなしでもまったく問題なく工場を見学できました。非常にクリーンな工場だなと感じたのですが。

堤 工場の環境整備も、試行錯誤を繰り返しながら地道に改良を重ねています。リサイクル事業は、行程が進んでいくにつれ、臭いや埃やゴミが必然的に発生するものなんです。工場をきれいに保つためには掃除行程を細かく組み入れられないといけません。しかし、掃除専門の担当者を置く、その人がゴミまみれになりながら仕事をしなくてはなりません。我々はそのようなシステムではなく皆の知恵で工程改善を進めています。柔らかなホースを宙ぶりにして、ダストを取りのぞく装置の開発は、まさに現場の人達の知恵から生まれました。リサイクルのイメージを変えるためには、まず働いている人たちに優しい工場でなくてはならないと考えています。

——日本のリサイクル産業は、これからどう発展していくとお考えですか？

堤 私自身この事業に関わりはじめてまだ10年ですので、大きなことは言えませんが、日本の企業は本当に真面目にリサイクルに取り組んでいると思います。技術も非常に発達しています。たとえば、松下グループが特許を取得しているブラウン管を分割する技術は、ヨーロッパにも輸出しています。しかし、だからこそ業界全体がもう少し自信をもって、より積極的に発言していくべきだと思うんです。リサイクルは、ゴミを処理しているのではなく、資源を再生産しているんです。リサイクル産業全体のコンプライアンス・信頼性をより向上させながら、一般の方がもっとリサイクル事業に「安心」「安全」といったポジティブなイメージを持ってもらえるように地道に努力していかなければなりません。

～取材を終えて～

堤社長へのインタビューを通じてひしひしと伝わって来たのは、「リサイクル」を決して受け身なものとして捉えるのではなく、「モノづくり」として捉え直そうという熱意だった。もちろんこの思想は日常生活にも応用できる。日々のちょっとした分別や再利用をルーティンワークではなく、クリエイティブなものとして捉え直したら、毎日のリサイクル活動がもっと楽しくポジティブなものになるはずだ（ソックモンキーのように）。自分自身、大いに感化を受けたMETEC取材となった。

今日のエコの芽 リサイクルはモノづくりである



ライター：小林ミノル

1975年大崎生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに達まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「縁の下の力持的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。
モノづくり企業のエコ意識



トップ
ページへ
戻る

WIRED VISION発

それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



第24回 (2008年4月7日 11時06分公開)

地下トンネルの使い方 ～松下エコシステムズ探訪記 (1)～

2007年末に平田爲茂社長の記者会見を聞いて以来、松下グループを代表する環境系企業として、松下エコシステムズが、どんな取り組みを“現場”でしているのか想像を膨らませていたのだが、ついに先日、同社の春日井工場を取材するチャンスに恵まれた。

名古屋駅から中央線に乗っておよそ30分。愛知県春日井市に同社本社工場はある。ここで主力商品である換気扇、送風機、空調機器などが開発・製造されているのだ。実は取材前、この敷地内には「地下トンネル」が存在するとうかがっていた。同社の敷地は、第二次世界大戦まで工廠（軍需工場）だったため、戦時中に物品の搬送用として地下トンネルが作られたらしいのだ。そして戦後60年たったいまでも、この地下トンネルはある用途に使われているという。これはぜひ拝見したい!! …というわけで、さっそく同社製造部門の川久保さんと同経営企画グループ広報担当の三根佳奈子さんに地下トンネルを案内していただいた。



敷地内の通路脇にある地下トンネル入り口。

地下トンネルの入り口は、敷地内の通路の脇にあった。屋根で覆われている上に階段までついでいてちょっと神秘的な感じが漂う。ドアの鍵を開けて中に入ると、地下へと続くはしごが下に伸びていた。



地下トンネルに通じるはしご。地面は見えない。

意を決してはしごを降りる。5メートルほどで地下に着くと、ひんやりとした空気が頬をなでる。まるで少年時代に返って探検している気分だ。トンネル内は蛍光灯が点いていて、比較的明るい。解説してくれる川久保さんや自分たちの声が反響する。先に進むと、左方向（方的には北側のような）に一直線に伸びている長い通路に突き当たった（川久保さんによると、戦時中は横に走る通路もあり十字型だったらしいが、すでに埋められているそうだ）。そして通路（＝地下トンネル）には、0M、50M、100M、200Mと距離を示す標識が整然と並んでいる。閉塞感の分、200Mでも案外近くに見えるが、ずいぶん長い地下トンネルなのだ。

「以前は、この場所で大型の換気扇やジェットファンなど開発中の新商品の実験を行っていたこともあります。ここなら距離もあるし、温度や湿度が年間を通じてほぼ一定で、風などの影響も受けません。まさにうってつけの実験場だったんです」（川久保さん）



全長200メートル。壁のシミが歴史を感じさせる。

現在は、精度の高い実験設備も導入されているため、ここで実験が行われることはもうないそうだ。しかし、この地下トンネルが、換気扇の実験場として使われるなんて、戦時中にここをつくった人たちは想像もしなかったに違いない。

そして今、この地下トンネルは、新たな役割を担っている。トンネルの真上に建っている技術棟の換気溝として利用されているのだ。夏も冬も常時18.5度に温度が保たれているため、この空気を地上の技術棟に送り込み、自然のエアコンとして利用されているのである！ 200Mの看板の地点に辿り着き、上を見上げると技術棟へ抜ける換気口が確認できた。



技術棟の床に設置された通風口。この床の下に地下トンネルがある。

かつては、無風というメリットを利用して実験場に、そして今は風の通り道としてビルの換気に地下トンネルを利用する。しかも、この換気システムには電気が使われていない。ダイナミックでありながら理にかなったこの“リユース”は、まさに“エコなシステム”である。しかも、歴史的な建造物の保存にも一役かっている。なんだかカッコいいではないか。建物全体や建物が建つ周りの環境も含めて、空気の流れを考える。そしてエコな空調システムを作ってしまう。そんな技は、京都駅ビルや六本木ミッドタウンにも活かされているのだそうだ！ 空気、水、土をきれいにする製品を扱う松下エコシステムズならではの発想に触れ、「なるほど、これがエコアイデアなのだ」と合点した。ここ春日井工場では、楽しくカッコいいエコアイデアにまだまだ出会えそうだ。（続く）

今日のエコの芽

柔軟な発想で、既存の設備を再利用する



ライター：小林ミノル

1975年大崎生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の“緑の下の力持ち的”な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

トップ
ページへ
戻る

WIRED VISION 発

それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



第25回 (2008年4月8日 15時24分公開)

春日井新工場のエコアイデア ～松下エコシステムズ探訪記（2）～

松下エコシステムズは、これまで分散していた大阪・藤沢両工場の機能を移転し、春日井工場に集約している。そこで、すでに稼働している新工場の内部を見学させていただいた。

換気扇、ミストサウナや浴室暖房機、ハンドドライヤーなど約2800機種を製造しているこの新工場の設備は、エコアイデアの宝庫だ。まず建物の2階から案内していただいたのだが、天井にはダクトが伸びていてその先に巨大なドライヤーのようなノズルがある。しばらくすると、ノズルがぐるぐると動き始め、かなりの勢いで風が吹き出した。

「これは、外気を取り入れた空調システムです。工場内に外気を放出することで夏は冷房の役割を果たします。また冬にはシーリングファンが上空の熱を還流させます。加えて、新工場の天井や壁面は、断熱性にすぐれた部材の利用や建築工法によって、電気を使った冷暖房装置がいりません。CO2に換算すると従来比8.5%の削減が可能になります」(同社製造部門の川久保清さん)



天井に設置されたノズル。360度ぐるぐる回る。



新工場の壁面。駐車中の自動車の上の穴が換気口。

一方ノズルの下では、作業員の方が、作業台に向かって製品を組み立てている。これは「セル生産」と呼ばれる、1人がひとつの製品の組み立てをほぼすべて担当する作業システムだ。作業台も担当する製品によって手軽に変形させることができるという。多品種少量生産化しつつある現在では、流れ作業方式よりもこのセル生産方式のほうが、生産性がより高いらしい。自分などは、これまで「工場での作業＝ベルトコンベアによる流れ作業」と考えていたのだが、どうやらそれは固定観念でしかなかったようだ。しかも、セル生産方式の導入によって、これまで年間14万8000kWh費やしていたコンベアの動力エネルギーはなんとゼロになるそうだ。



セル生産方式によって作業が行われている。

続いて、自社製の高性能空気清浄機が導入されているクリーンルームや、大幅な効率化を可能にした変電設備室などを見学しながら通路を歩いていると、三輪自転車が荷物を運んで通り過ぎて行った。「あれはなんだ!？」と思う間もなく、次の自転車が通り過ぎる。えっ、工場に自転車? しかもよく見ると電動!?

「新工場稼働とともに電動自転車を導入しました。もちろんPanasonic製です。掃除や荷物を運搬するために、10台前後が稼働しています。掃除用にはモップをつけ、運搬用には荷台がついています。これも省エネに役立っているんですよ」(川久保さん)



荷物を載せた電動自転車が通路を走り抜ける。

地下トンネルの換気と同じく、環境に優しい最新の技術や自社製品を現場に導入し、さまざまな役立て方を。しかも一工夫も二工夫もほどこして、これこそモノづくりのエコアイデアではないだろうか。

今日のエコの芽
自社製品を工夫して現場に導入

ライター：小林ミノル

1975年大崎生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに達まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「緑の下」の力持ち的な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

トップ
ページへ
戻る



第26回 (2008年4月9日 11時09分公開)

技術棟探訪 ～松下エコシステムズ探訪記（3）～

新工場の見学後に向かったのは、2004年に建設された技術棟だ。この技術棟をはじめ、構内では、さまざまな実験が日夜行われている。たとえば、風速20～30メートルの風雨の中（台風級！）で、換気扇から水が浸入しないかを調べる実験、バスルームやキッチンが舞台セットのようにまるごと設置されている試験室での耐久試験温度が50度前後で保たれ続けている部屋での高温耐久試験、機器の騒音具合をチェックする無音室での実験などなど。ここまで徹底して換気扇の品質を追求しているメーカーはほかにないという。



風雨実験を行う設備。換気扇を中央部分に設置して右側のノズルから水や風を浴びせる。

考えてみると、換気扇は外界と室内を隔てながら、きれいな空気と汚い空気を入れ替える役割を果たしている。ということは恒常的にハードな環境下で利用される運命にある。また何十年も使い続ける住宅設備の一部でもある。だからこそ耐久性が求められるし、これだけの実験設備が必要となるのだ。



キッチンが設置された実験設備。実験に使われた油の臭いがする。

いくつかの実験施設を見学後、最後に換気扇の耐久試験室にたどり着いた。ここでは、何百台もの換気扇を24時間365日回し続け、どのように故障が発生するのか調べているのだそう。しかも、そんなエンドレスの実験を耐え抜き、20年以上動き続けている換気扇があるという。その換気扇の場所に案内していただくと、他の換気扇の多くはクリーム色なのに、ひとつだけ水色の羽の換気扇が！ そういえば、子供の頃に見かけた換気扇ってこんな色だった…。この水色の換気扇は、20年間、ずっとここで回り続けているのだ。



中央水色の羽の換気扇が、1985年から回り続けている伝説の1機。

「ここまで動き続けてくれれば、なんといっても開発者冥利につきますね。長く使い続けることがエコにもつながりますし」

こちらを案内していただいた経営企画グループ広報マネージャーの森林章広さんは、照れ笑いしつつ、しかし誇らしげにそうおっしゃった。

そういえば、技術棟の見学中、ときどきすれ違った研究者の方々、みんな“鬼気迫る”といってもいいような真剣なまなざしで、データや製品の具合をチェックされていた。換気扇をはじめ、ひとつひとつの製品には、そういった開発者の方たちの熱意が込められている。だからこそ、何十年もずっと壊れずに動き続けているのだ。

今日のエコの芽 開発者の方の熱意がエコにつながる



ライター：小林ミノル
1975年大崎日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の“緑の下の方”の力持ち的“環境対策を世に広めたい”と考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。
～モノづくり企業のエコ意識～



トップ
ページへ
戻る

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

2008年9月23日公開

(このコンテンツは、2007年10月～2008年5月までWIRED VISIONで連載した内容を一部再編集したものです。)

WIRED VISION発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



第27回 (2008年4月10日 11時10分公開)

メダカハウスの効用 ～松下エコシステムズ探訪記 (4)～

松下エコシステムズの敷地内には、屋内屋外問わず、いたるところに省エネ設備やエコ設備が設置されていた。トイレに行けば、雨水や中水が利用されているし、通路の蛍光灯は、その下を通ると自動的に点灯し、通り過ぎると自動的に消えてしまう。前回紹介した技術棟は、地下トンネルを利用した空調システムに加え、太陽光発電システム、屋上緑化などを取り入れた省エネビルとなっている。敷地には、社員の方が植樹・育成している木々もある。



通路を歩くと自動的に蛍光灯が点灯する。



社員の方が植樹・育成している木々。



緑化された技術棟の屋上。

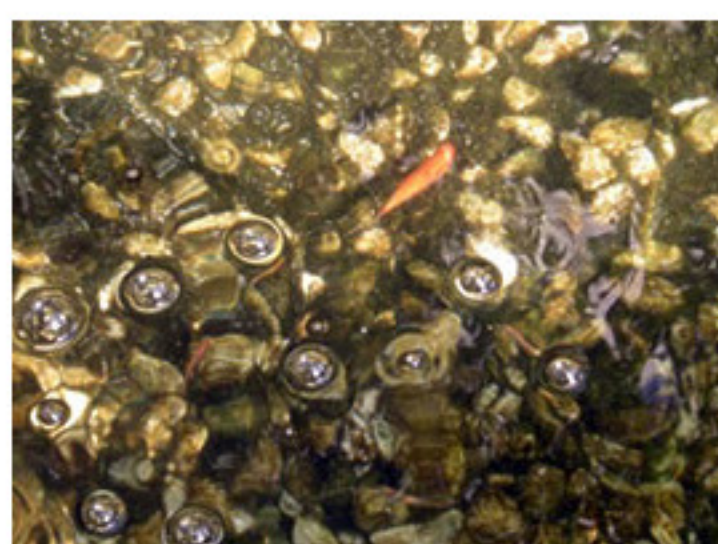


技術棟の南壁面に設置されたソーラーパネル。

そういった数々の取り組みや設備を紹介していただきながら、続いて案内していただいたのが「メダカハウス」という設備。浄化設備に隣接しているこの「メダカハウス」では、浄化された工場排水の池の中をメダカや金魚、鯉が泳いでいる。同社の排水処理技術によってメダカが住めるほど工場排水がキレイに浄化されているのだ。



浄水設備に隣接しているメダカハウス。



中ではメダカや金魚が元気に泳いでいた。

松下エコシステムズグループは、換気分野に加えて、1970年代から水や土の浄化技術を開発し、水浄化事業や土壌浄化事業に進出している。たとえば、半導体・液晶工場向けの超純水製造・リサイクルや工場排水の浄化、バイオ技術を利用して有害物質を含んだ土壌や地下水を無害化する「バイオレメディエーション」と呼ばれる技法などなど。うかがうところによると、換気で培った技術が、これらの浄化事業にも応用されているようだ。空気と土と水という人間が暮らしていく上で最も重要かつ基本的な要素を再びきれいにする役割を松下エコシステムズは担っている。しかも、松下エコシステムズのすごさは、そういった施設内にある環境事業や浄化設備の多くを自社開発している点だ。これは「環境技術立社」を標榜している企業ならではの特色だ。

今日のエコの芽
空気の技術を土や水に応用

ライター：小林ミノル

1975年大晦日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに達まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の“緑の下の力持ち的”な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

トップ
ページへ
戻る

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

2008年9月23日公開

(このコンテンツは、2007年10月～2008年5月までWIRED VISIONで連載した内容を一部再編集したものです。)

第28回 (2008年4月21日 01時00分公開)

気調ハウス訪問 ～松下エコシステムズ探訪記
(5)～

松下エコシステムズの敷地内にある一軒家。こちらは「気調ハウス」と呼ばれているショールームだ。同ハウスの室内を廣石和明お客様支援グループ・GM（グループマネージャー）に案内していただいた。廣石GMは、社内で「換気博士」とも呼ばれる換気の専門家なのだ。

当日屋外は、あいにくの曇天で肌寒かったのだが、ドアを開けて玄関に入ると、そこはもう温かく快適な空間だった。



春日井工場の敷地内にある一軒家の気調ハウス。

気調ハウスの室内は、24時間全室冷暖房換気が行われていて、設定温度が21度、湿度が48%に保たれている、という。だからこそ、日の射さない玄関から快適に感じたのだ。そして、この気調ハウスは、24時間空調の効果を最大限に引き出すために、寒冷地（東北・北海道）レベルの高気密高断熱設計になっているそうだ。

玄関から、他の部屋に入っても、どこも変わらず暖かい。この快適な空間は、家全体の空調を一手に管理している空調システムのおかげだ。その本体は、バスルームの天井裏に設置されている。天井が透明になっていて、設置されている空調システムを見ることができた。そして、室内の温度・湿度がどのような状態なのかは、リビングのデジタル掲示板に表示されている。



バスルームの天井に設置された換気システムの本体。



リビングに設置されている電光掲示板。

室内はスリッパを履かなくても床が暖かい。特に床暖房機能が備えられているわけでもないのに、ほんわりと暖かいのは、ほんとうに驚いた。それにしても全室24時間換気となると電気代も馬鹿にならないのでは？



「快適性を肌で感じていただくためにスリッパは用意しておりません」の文字。

「高気密高断熱住宅なら、熱が外にほとんど逃げません。そのため、建物全体の温度を上下させるのに比べて、室内の空気温度を上下させるのは、はるかに少ないエネルギーで済みます。さらに、室内外の換気も、『熱交換器』によって、エネルギーロスを少なくしています。熱交換器というのは、暖気と冷気の入替時に暖気の熱を冷気に転化するシステムで、『熱交換素子』を用いて、給気と排気を交差させながら熱を移すんです。このシステムで換気と冷暖房を24時間行っているのですが、スイッチを入れたり切ったりして温め直したり冷やし直したりするより、かえって電気代もお得なんです」



押し入れの天井から屋根裏も見学可能。天井には断熱材が厚く敷かれていた。

また、リビングの天井には、実験用の換気設備などいくつも設置されていた。気調ハウスはショールームとしての役割のほかに、実験設備の役割も担っている。リビングのみならず、二階の和室や洋室等各部屋にも換気設備は複数備え付けられていたが、その多くは実験用で、商品化の前に実際の住環境に近い気調ハウスで性能チェックをおこなっているのだそうだ。



天井にはいくつもの換気口がついている。

「換気役割には歴史的な変遷があります。もともとは内部に居る人間が呼吸を続けるために換気が必要でした。1950年に制定された建築基準法でも、換気と採光のための開口部の設置が義務づけられています。そして、公団住宅が普及しはじめた1950年代後半には、台所や浴室等局所換気の必要性が生じ、台所やトイレや浴室に換気扇が設置され始めます。弊社も、1958年に初めて公団住宅向けの換気扇を商品化しました。

続いて、高気密住宅が普及し始めた1980年代からは、結露対策のために換気が要請されるようになります。さらに1990年代以降は、シックハウス対策としても換気的重要性が目を集めるようになりました」

今後は花粉や粉塵等が混ざった外気を、いかにきれいにし室内に取り込むかが重要になってくると廣石さんは語る。2003年に改正された建築基準法では、新築される住宅は24時間換気を行わなければならないと定められたそう。住宅の進化に伴って、求められる換気役割は変化し、そしてその重要性はどんどん増している。今回、気調ハウスを見学させていただき、廣石さんからお話をうかがったことで、住まいや暮らしをより快適にするために換気が果たしているいくつもの役割を知り、改めて驚かされた。

今日のエコの芽

24時間換気は住む人も財布もホッとさせる



ライター：小林ミノル
1975年大崎日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の下の力持的 な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ [「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。](#)

▶ [WIRED VISIONのサイトはこちら。](http://wiredvision.jp/)
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」も楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で起きている。
～モノづくり企業のエコ意識～

トップ
ページへ
戻る



第29回 (2008年4月22日 01時00分公開)

平田為茂松下エコシステムズ社長インタビュー ～ 松下エコシステムズ探訪記 (6) ～

松下エコシステムズ春日井工場シリーズ。取材見学の最後に、平田為茂同社社長にお話をうかがった。環境技術立社を掲げる同社では、どのような「エコアイデア」戦略が練られているのだろうか。

— これまで神奈川県藤沢市と大阪府大阪市にあった工場設備を2007年度から春日井工場に集約された狙いはどこにあるのでしょうか？



平田為茂松下エコシステムズ株式会社代表取締役社長。1946年生まれ。1969年松下電器産業入社。公共システム営業部門、システム営業本部長、取締役を歴任。2002年より、松下精工株式会社（現松下エコシステムズ株式会社）代表取締役社長に就任。

平田 日本のモノづくりのあり方が変わってきています。日本で開発すべき技術がより高付加価値の技術に移りつつあるのです。我が社としても、分散していた工場を一ヶ所にまとめ、技術者同士の横の連絡を密にしながら研究開発能力を高めようということで、集約化を決断しました。また、工場をまとめるに当たって、数々のクリーンファクトリー化、省エネ化にも取り組んでいます。

— 松下エコシステムズでは、工場の集約化とともに、グローバル化を進めていますが、具体的な方向性を教えていただけますか？

平田 空調というのは生活に密着した分野なので、生活習慣や風土に根ざした商品を開発しなければなりません。たとえば、住宅の高気密高断熱化が進み、フレッシュエアを室内にどう取り込むかが近々の課題ですが、その土地土地によって環境が大きく異なります。モスクワでは冬の気温がマイナス30度にも達し、外気と室内の温度差は50度前後になります。それをそのまま換気するとすると、外から入って来た空気を温め直すのに、ものすごいエネルギーを使わなくてはなりません。エネルギーの無駄を避けるためには、効率的な熱交換システムをまず開発すべき、ということになります。一方中国では、黄砂などをどのようにフィルタリングするかが課題となります。ですから、ある地域で生産したものは、その地域で利用・消費していただくという「地産地消」の精神で、販売する国や地域に合わせた商品開発をできるだけ現地の工場で行おうとしています。

— 環境技術立社としての御社の強みはこういったところにありますか？

平田 弊社は、扇風機・換気扇を始めとする空調機器メーカーとして出発しました。換気扇は2006年に国内生産台数1億台を突破しています。さらに家庭用の空調機器のみならず、トンネルの粉塵処理システムなど大規模プロジェクトの換気システムの設計開発にも携わっています。一方、グループ企業の松下環境エンジニアリングでは、空気、水、土壌の浄化事業やクリーンファクトリー事業を進めています。工場内の空調をはじめ、たとえば半導体製造時の純水精製、工場排水の浄化・リサイクルのシステム、工場跡地の土壌浄化など、モノづくりの現場と切っても切れない設備やシステムを提供しています。我々には、長い歴史の中で培った浄化技術と松下グループ内の連携による幅広いエンジニアリングノウハウがあります。それを活かした環境関連事業を実現できるのが強みですね。



1913年に同社から発売された日本初の量産型交流扇風機「タイフーン」。

— 今後はどのような事業展開をお考えですか？

平田 これはまだ夢の段階ですが、中小規模の工場跡地の浄化事業を安価な価格で提供したいと考えています。これまで土の浄化というと敷地の土をすべて入れ替える方法が主流でした。しかし、それでは多額の費用がかかってしまいます。我々が開発したアムテクリーンという微生物活性材を用いたバイオレメディエーション法（微生物による土壌浄化技術）を利用すれば、時間は少しかかりますが、はるかにコストを低く抑えられます。

— 松下グループの環境事業において、御社はどのような役割を担っているのでしょうか？

平田 松下グループは、日本の総合家電メーカーの先陣を切って環境対策を推進しようとしています。松下グループの環境への取り組みは「Panasonic」としての志だと思っています。そのなかで、空調や水質・土壌浄化といった環境関連技術を保有している我々松下エコシステムズグループは、各ご家庭により環境に配慮した製品をお届けする一方で、工場のクリーンファクトリー化や空気・水質・土壌の浄化事業をとおして、街や社会のよりよい環境づくりにもさらに貢献していきたいですね。松下グループ全体の環境対策・環境事業にも、緑の下の力持ちとして、しっかりとその役割を果たしていくつもりです。



～取材を終えて～

国産初の量産型扇風機の開発からスタートした同社は、家庭内空調機器とともに、工場内やビルの空調システム、大型トンネルの粉塵処理システム、水質・土壌の浄化など、さまざまな分野の環境系事業を手がけている。平田社長のお話をうかがっていて、松下エコシステムズの「環境技術立社」としての強みは、その歴史のなかで培われた技術をさまざまなアイデアによって別のジャンルの製品に応用したり、次の世代の技術・製品に活用していくため向上と探求の賜物なのではないかと感じた。そして、そうした探究心や哲学は、自らの現場＝工場の設備にも、しっかりと反映されているように思う。今回のシリーズで紹介してきたように、地下トンネル、技術棟、新工場、気調ハウス…と、いたるところに「エコアイデア」が光る松下エコシステムズ・春日井工場の訪問体験は、まさに驚きの連続だった。

今日のエコの芽 技術とアイデアを活かしてエコにつなげる



ライター：小林ミノル

1975年大崎日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通じ、ニッポン企業の「緑の下の力持ち的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。



トップ
ページへ
戻る

WIRED VISION発

それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～



特別編： (2008年4月23日 01時00分公開)

不肖・編集Eが「エコアイデア ワールド」を訪ねた

今回は、当ブログの担当ライターの小林ミノルさんの臨時ピンチヒッターとして、不肖・編集Eが六本木の東京ミッドタウンで行われた松下グループの展示会「エコアイデアワールド」を訪ねた。真面目な小林さんとは違ってかわって、まったりと書かせてもらおう。

ミッドタウンの地下1Fの広場といえば、昨年10月に「Nのエコアイデア」という展示会を拝見したことも記憶に新しい。それに……ミッドタウンの近所に美味しいラーメン屋があるという情報をちょうど耳にしていたところだ。帰りに寄っていこう……笑。

というわけで、近頃、めっきり華やかな場所から遠ざかっていた不肖・編集E、久しぶりに大江戸線六本木駅からミッドタウンに向かったのだが……

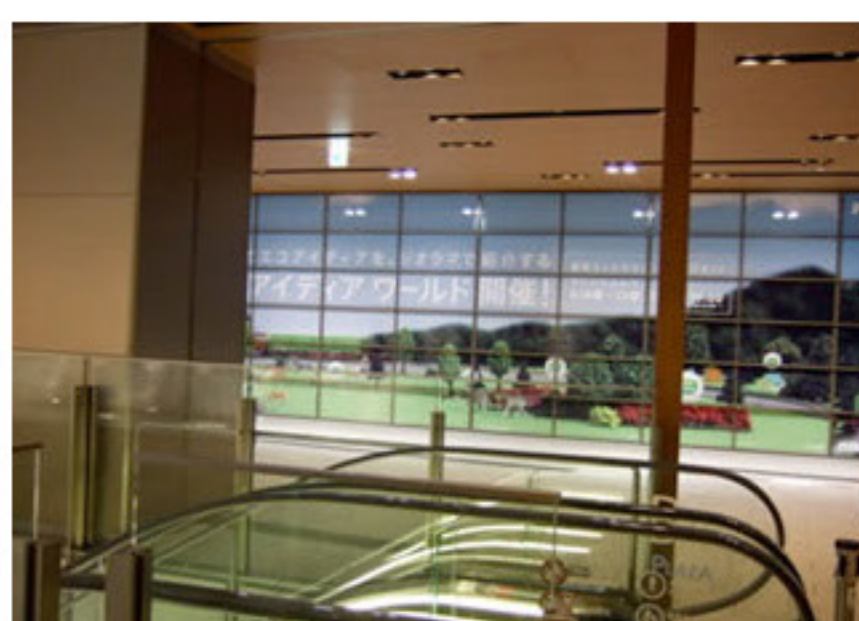
おや？ 駅のエスカレーター脇に、見かけたことのある「eco ideas」マークの入ったポスターが……。

「今日は、この「eco ideas」関連のイベントに行くのだ。偶然だな～」などと思ったのもつかの間、長いエスカレーターの両脇に、「eco ideas」のポスターが、びっちり。

「おお～」



さらに、ミッドタウン内に入ると、「おお～。壁一面だ～」



「ええ～、今度は、柱、全部だ～。やるな～」



……と、このカラフルな柱に導かれるように、イベントが行われる広場に到着。

「ひえ～、ジオラマだ～。でかい～。細かい～」



100人以上はいると思われる取材陣と、見物のお客さん、さらには、「何が行われているの？」と怪訝そうに覗き込む外国人の方たちをかき分けかき分け、ジオラマの近くに。

「ひゃ～、よくできてる」。直径10メートル近くはあるだろうか（9メートルとのこと）。海や山があり、砂漠？らしきものもあり、街があり、住宅があり、工場もある。電車やバスらしきものも動いている。「日本の町並みを抽象化しているのかも。もしくは、「エコアイデアワールド」というぐらいだから「世界」の様子を現しているのか……?」。しかし、見れば見るほどよくできている。家の中には、人もいるし、道の横でなにやら作業をしている人もいる……。

そんなこんなで、司会のお姉さんが登場して、イベントスタートだ。さらにしばらくして、女優の内山理名さんが万来の拍手で迎えられて、会場も一気に華やか。ようし、写真撮るぞ～。



正面は、凄いか메라の数。撮影列まで行けない……。



もう少しで撮影列……。しかし、前の人、手が邪魔だ～。

へ～。たどりついた。



松下電器産業の大橋英嗣取締役と、女優の内山理名さん

そんなこんなで……笑。内山さんと一緒に、このジオラマについての説明を聞く。ここでようやくわかったのだが、このジオラマは、松下グループが各地で展開している環境活動の取り組みや環境保全の大切さをこのジオラマとおして理解してもらおう、という目的で作られているらしい。

このジオラマ内には、バスが周回していて、その運転席に設置された小型カメラから撮影された景色が、ジオラマの正面、両サイドのモニターに映し出される。これが驚くほどよくできていて(いつこい?)、現実ともCGとも違う、絶妙な雰囲気を感じ出しているのだ。いや、ほんと。そのバスが、さまざまな「エコポイント」で停車しては、環境への取り組みを映像で解説していく……というわけだ。



正面、両サイドのモニターにバス運転席の小型カメラからの映像が映し出される

たとえば、ネオンサインを夜8時に一斉消灯する活動、日本と中国の従業員による「CO2削減10万人エコチャレンジ」という活動、さらに、大気中の熱を利用して、省エネを実現するクリーンエンジンを使った冷蔵庫やエアコンの開発、発売……などなど。その意味では、このジオラマは、特定の地域を再現したというよりも、松下グループの環境活動のエッセンスが集められた風景なのだ。



環境への取り組みを正面、両側のモニターで解説していく

ジオラマ内を走るバスから映し出された映像の出来のよさに関心して、しばらく解説はポ～ッと聞いていたのだが、いつの間にか、家、街、工場、その周囲、とあらゆる方面に、さまざまなアイデアを尽くして環境活動が行われていることを理解できていた。その活動の詳細は、[こちらのウェブサイト](#)でもわかる。こっちはジオラマだ～。

今後、このジオラマは、4月25日～5月6日(大阪 OBPツイン21-アトリウム)、5月9日～5月15日(福岡 ライオン広場)、5月23日～5月29日(名古屋 ラシック1F)、6月13日～6月19日(仙台 JR仙台駅2階・改札口前)と、全国を巡回し、洞爺湖サミットが行われる期間にあわせて、6月28日～7月13日には、新千歳空港2階・センタープラザで公開されるという。

ジオラマの移動がめっちゃたいへんではないのか、と余計な心配をしますが、その出来映えにびっくりしたり、ほ～と唸ったりしながら、企業の環境活動の最前線が何が行われているのかをしっかりと把握もできる貴重な楽しい体験になることは間違いないので、お近くの方は、ぜひチェックされることをお勧めしたいな。模型好きの方には、なお良し!

今日のエコの芽

ジオラマを覗くと希望が見えた

ライター：小林ミノル
1975年大崎日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに運まきながら気づきはじめる。取材を通して、日本の企業「緑の下の方持ち的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

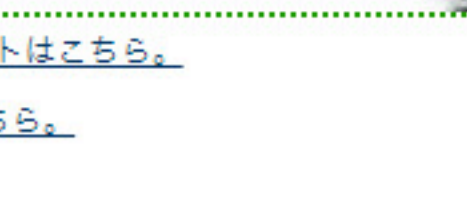
▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION発

それは現場で
起きている。

～モノづくり企業のエコ意識～

トップ
ページへ
戻る



特別編： (2008年4月24日 01時00分公開)

セヴァン・カリス＝スズキさんと「アースキャラバン2008」

さて、今回も、当ブログ担当ライター小林ミノルさんのピンチヒッターとして、不肖・編集Eが、書かせていただきます。

セヴァン・カリス＝スズキ、という女性のことをご存知だろうか。1992年、ブラジル、リオデジャネイロで開催された環境サミットに、12歳で子供の環境団体の代表として参加し、伝説と言われるスピーチを行ったことで知られる世界的な環境運動家だ。そのスピーチの一部を抜粋しよう。

「・・・(略)私の世代には、夢があります。いつか野生の動物たちの群れや、たくさんの鳥や蝶が舞うジャングルを見ることです。でも、私の子どもたちの世代は、もうそんな夢をもつこともできなくなるのではないかとあなたがたは、私ぐらいのときの時に、そんなことを心配したことがありますか。

(略)

ここでは、あなたがたは政府とか企業とか団体とかの代表でしょう。あるいは、報道関係者か政治家かもしれない。でもほんとうは、あなたがたもだれかの母親であり、父親であり、姉妹であり、兄弟であり、おばであり、おじなんです。そしてあなたがたのだけれどもが、だれかの子どもなんです。私はまだ子どもですが、ここにいる私たちみんなが同じ大きな家族の一員であることを知っています。そうです50億以上の人間からなる大家族。いいえ、実は3千万種類の生物からなる大家族です。・・・(略)」

(翻訳：ナマケモノ倶楽部 全文)

このスピーチは、YouTube(日本語字幕付き)でも見られる。凄いい迫力だ。

また、このスピーチは、絵本にもなっている。

セヴァンさんのことを知って環境活動に目覚め、セヴァンさんに憧れて自らフェアトレードを始めたという若い女性と話をしたことがあるが、日本でも多くの人たちに影響を与えている。

そのセヴァンさんのことは、これまで本や映像で見たことはあったのだが、それもちょっと前のものばかり。今回、松下グループが支援するエコ体験イベント「アースキャラバン2008」の説明会に、セヴァンさんがプロジェクトリーダーとして登場するということで、一度、どういふ人なのか直に見てみたいと思ってもあって、会場を訪れた。

「アースキャラバン2008」は、地域の自然と共存するライフスタイルを実践している方を講師として招き、子供たちと自然に触れながら環境学習を行うという体験イベントだ。このキャラバンは、家庭の廃食油から精製されたバイオディーゼル燃料を使用した「アースキャラバン号」で日本列島を縦断する。すでに、4月5日、沖縄西表島でその第一回が行われていて、説明会ではその様子も知ることができた。このあと、日本列島を北上して、全国20箇所で開催され、6月29日の北海道函館での開催を目指す、という。



沖縄西表島で行われた「アースキャラバン2008」の模様

このあたりの様子は、[こちらのサイト](#)に詳しくレポートされていくようだ。

松下電器では、2006年から小学生を対象にさまざまな体験イベント「パナソニックキッズスクール」を後援・開催しているという。環境をテーマにしたものでは、この「アースキャラバン2008」の他にも、環境活動の第一人者たちが、環境をテーマに小学校を訪問して出張授業をする「エコ学習」や、身近なエコ活動の実践を絵日記の形で募集する「エコ絵日記コンテスト」も、行われている。

「パナソニックキッズスクール」については、[こちらのサイト](#)が詳しいが、環境をテーマにしたもの以外にも、科学実験室や郷土料理教室もあり、ほとんど無料で行われていてビックリ。科学実験室などは、ひじょうに興味をそそられる・・・。

さて、今回、セヴァンさんが、「アースキャラバン2008」の説明の中で強調していたのは、環境問題という世界レベルの課題を解決するためには、ローカルな地域に根ざした知識を知ることや、ローカルレベルで努力し、地域社会に共生することが大切だということだ。



「アースキャラバン2008」の趣旨を説明するセヴァン・カリス＝スズキさん

ここ数年、「Think globally, act locally(地球規模で考えながら、地域で活動する)」という言葉をしばしば耳にするようになったが、セヴァンさんも、そうした考えに根ざしているようだ。特に子供の頃に、地域の自然とふれあい、その場所ならではの知識を得ることは、後になってグローバルな世界の事柄をしっかりと考え、イメージネーションする上でも、思考の土台となるので、ひじょうに重要なだろう。

12歳で環境サミットでスピーチし、子供の視点から社会の変革を訴えたセヴァンさんも、すでに28歳。子供の環境教育を実践することこそが地球の未来につながるという意識から、こうしたイベントに積極的に参加しているに違いない。

環境運動家という・・・語られることはまさに正論なのだが、ときに説教くさく(・・・すみません)、しばしば辛くくさく(もう、すみません)、さらに、胡散くさい(勝手な偏見です)、と感じることもある、やや斜に構えた視線を向けがちな不肖・編集Eなのだが、セヴァンさんは、すっきりと柔らかない物腰の中に、強い意志を感じる魅力的な女性だった。また、いつか話を聞いてみたいな。

今日のエコの芽

子供の視線が未来をつくる



ライター：小林ミノル

1975年大崎日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに通まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「緑の下の力持的」な環境対策を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>

他の「エコの芽」もお楽しみください。

トップ
ページへ
戻る



最終回 (2008年5月13日 17時59分公開)

マチュピチュと企業の21世紀的な環境活動

4月下旬、2週間ほど南米のペルーとアルゼンチンを旅行した。そのため、E編集長にこの連載のピンチヒッターをお願いすることになってしまった（E編集長、ありがとうございます!）。

ペルーでは、首都のリマとクスコ、マチュピチュを、アルゼンチンではブエノスアイレスとイグアスの滝を回ったのだが、そのなかでもやはり「空中都市」マチュピチュは、「よくもまあこんな山の中に…」とタメ息をつくしかない絶景だった。



1911年にアメリカの考古学者ハイラム・ビンガムによって発見されたマチュピチュは、インカ皇帝の別荘地とも神殿ともいわれている。

麓のマチュピチュ村からバスに乗って急斜面を登って行き、入場ゲートをくぐると、石で組み上げられた遺跡が5km²に渡って広がっている。そして雲が遺跡と同じ高さの山にかかり、遥か下方には先ほど出発したマチュピチュ村やウルバンバ川が小さく見える。高度2400メートルの山の尾根であるここに、数百年前のインカ人は、石垣を作り、作物を栽培し、暮らしていたのだ。

観光地としてのマチュピチュの人気はとても高く、世界各国から訪れた昨年の観光客数はなんと50万人を超えるそうだ。もちろん自分たちも含め日本人観光客の姿も多かった。ただあまりにも人気が高いため、環境や遺跡への影響も指摘されている。観光客の靴のせいで、石が削れてしまうなどの問題も報じられていて、すでにマチュピチュまで続くトレッキングコースとして有名なインカ道などは入場規制が導入されている。遺跡内でも、観光客が遺跡に登ったりしないか監視をする人や、遺跡を整備する人たちが大勢働いていた。

マチュピチュの遺跡としての特異さや、それを保存するために費やされている労力の大きさは、やはりこうした「現場」に立たないとわからなかっただろう。そして、その場に立って、マチュピチュのような遺跡を、過去からの資産・遺産として、次の世代に引き継ぐことが自分たちの世代の責務なのだと感じた。と同時に、地球の裏側からこうして自分が観光のために訪れることそのものも、ある意味、この遺跡にとって負荷をかけていることだろうとも思う。このあたりは、難しい問題だ。現代だからこそ、ペルーまで観光に訪れることができ、その素晴らしさを痛感したわけだが、誰もが気軽に訪れることができる場所になったことで、その存在が危うくなっている…。多くの人が物質的に豊かになったいっぽうで、地球環境が危機にさらされてきている、という環境問題にも通じるかもしれない。



続いて訪れたイグアスの滝の国立公園内（アルゼンチン側）の移動手段は、鉄道だった。数年前にCO₂の排出量を減らすため、バスから変更されたのだという。

今回、この連載を通じて取材させていただいたのは、人々の生活を便利にする製品を作り続けているモノづくり企業が、今、全力で環境問題の解決に向けて、努力している様だった。その熱意や細部へのこだわりは、自分の想像をはるかに超えていた。たとえば、松下エコテクノロジーセンターや松下エコシステムズの工場では、技術力を商品開発に活かすのみならず、洗濯機のドラム部分をテーブルに再利用したり、地下トンネルを空調設備に転用するなど、3R（リデュース、リユース、リサイクル）の精神が工場のインフラ整備にまで徹底されていた。

私たちは、環境問題の存在を知ったからといって、なかなか便利な生活を手放そうとしない。そこで、今や環境問題の最前線は、モノづくりを通じて、環境問題の解決に貢献しようという「企業」が、大きな役割を担っている、ということだろう。正直、連載が始まる前まではゴミの分別は面倒くさいと思っていたし、エアコンや電気もつけっぱなしにしてしまうことも多かった。しかし、現場の人たちがどれほど努力をしながら環境に配慮した製品を開発しているかを目の当たりにし、大げさかもしれないが、自分が使っている製品を開発した人たちの情熱に応えた使い方をしなきゃ、という気持ちが芽生えた。また、取材を通じての多くの出会いがなかったら、ペルーの遺跡で、その行く末など考えなかったかもしれない。長い歴史の中にいる自分と、文明の便利さを享受する自分。そのバランスをとりながら、これからどう行動して行くか…。取材させていただいた皆さんの顔を思い起こしながら、これからは少しずつ環境問題のことを考えていきたい。この取材は、その大きなきっかけを与えてくれた。

取材に応じていただいた方々、読者の皆さん、どうもありがとうございました。

今日のエコの芽 人が暮らすところに必ずエコはある



ライター：小林ミノル

1975年大晦日生まれ。30歳を過ぎ、エコの大切さに達まきながら気づきはじめる。取材を通して、ニッポン企業の「縁の下」の力持的「環境対策」を世に広めたいと考えている。



▶ 「eco ideas」スペシャルサイトはこちら。

▶ WIRED VISIONのサイトはこちら。
<http://wiredvision.jp/>



他の「エコの芽」もお楽しみください。

WIRED VISION 発
それは現場で
起きている。
～モノづくり企業のエコ意識～



トップ
ページへ
戻る